俺たちのクリスマスは戦場でした

うぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺たちのクリスマスは戦場でした

【Ｎコード】
Ｎ７１６２Ｙ

【作者名】
ういぃ

【あらすじ】
プチ不幸な人生を送っている、俺こと桜庭琢磨。
クリスマスも近づいた冬のある日、サバゲー仲間から、『サンタ狩り』なるものに誘われた。どうやら、サンタの持つ幸せの袋を手に入れると幸せになれるらしい。
いつも通り予定も無いし、不幸な自分の慰めと思い参加する、が
翌日、「たっくん、付き合ってください！」
学校一の美少女に告白されてしまった。
あたふたしていると彼女もサンタ狩りに参加するとか言い出し……。

始まる前から人死んでるし、悪魔との契約者とかいう能力者まで出てくる始末。
もうここ、現実じゃねーよ……。

戦場に幸せは転がっていない（前書き）

２ｃｈのサンタ狩りというスレを、自分なりにアレンジしてみました
もちろんサンタは元ネタ通りにチート性能です

戦場に幸せは転がっていない

ごく平凡、と言えば語弊がある俺、桜庭琢磨（さくらば たくま）。
今まで、プチ不幸とも言える人生を送ってきた。
財布を落とせば中身を抜き取られて警察に届けられる。
好きな女の子の前で派手に転ぶ。
音楽の授業で、歌のテストで声が出ないなどなど。
不幸のどん底とも言えないのが憎たらしい。そんな小さな不幸ばかり起こる人生だった。
そんな俺がいる此処こそ、

「早く撃て！！　逃すな！！」

戦場だった。
もちろん、サバゲー（サバイバルゲームの略称）なんてチャチなもんじゃあ断じて無い。
本当に人が死ぬし、ものホンの銃弾だって頭上を通り過ぎる。
アサルトライフルのＡＫ－４７を構える手が汗でびっしょりと濡れていた。ヌルヌルとした感触が気持ち悪い。

「おい、新人！　ボサッとしてんじゃねぇ！！　“幸せ”は分けてやらねえからな！！」
「は、はいぃっ！」

恐怖で肩を震わせ、グリップを力いっぱい握る。
先端近くに取り付けられた突起（なんて呼ぶのか分からないけど、ゲームとかで主観視点にした時、敵を撃つ目安になる部分）を敵に合わせる。
俺たちが何と戦っているのかって？

「たっくん」

隣でＡＫ－４７のマガジンを取り替えている同い年の女の子が、琢磨、つまり俺のあだ名を呼んだ。と言っても、呼んでいるのはこの女の子ぐらいなものだ。

その女の子は、油断すればこんな血が踊り肉が弾ける戦場でも抱きしめたくなるほどの笑顔を浮かべ、こんな人の血が舞い弾丸が刺してくるような危険地帯にいながら呑気な声をあげる。

「頑張って、“幸せ”を手に入れようね」

ぼお～、っと顔が火照ってしまった。

いけないいけない。見とれている場合じゃない。とにかく撃たないと。

そういえば、誰と戦っているのか、だったっけ？　それは、背中に大きな袋を背負って、赤い服と帽子を着たーーー

「くそっ！！　トナカイが邪魔で当たらねえ！！」

白い髭を生やした、と言っても目の前にいるほとんどがそんなの生やしてないけどね。

「くそ、当たらない……ッ！！」

誰でも知っているのに、誰にも信じられていない存在。

「君たちみたいな者達に、“幸せ”は勿体無い」

ーーーサンタだった。

戦場に幸せは転がっていない（後書き）

クリスマスにはまだ早い？

知らん！！

リア充爆発しろ！！

学校に昔夢見た青春はない

ことの発端は数日前の出来事だった。

クリスマスも間近に迎えた十二月某日。

「はぁ……」

授業の合間の休み時間。桜庭琢磨はヘッドホンで音楽を聞き、机に伏せていた。

聞いているのは、最近ハマった歌手の『Ｄｅａｒ・Ｘ．ｍａｓ』と呼ばれる三人グループの曲だった。単調なリズムが心を落ち着かせてくれて、一人でいても寂しさを感じさせない。

まるで自分のためにあるような曲だった。

桜庭琢磨は休み時間も一人だ。だが、決して友達がいないわけではない。表面的な付き合いの友達ならクラスの男子全員が当てはまるほどだ。

なら、なぜこんな状況なのかと言えば答えは二つ。

一つは、固定のグループに属していないからだ。八方美人の人付き合いをしていたら、いつの間にか“ぼっち予備軍”になっていた。

二つは、自ら話しかけない人間だからだ。自分から話しかけることで相手が嫌な思いをするんじゃないか、と内心で恐がってしまっている。だから、相手から話しかけられることで、たとえ嫌われても相手が悪いんだと責任転嫁できる。

人と関わるのが怖い人間だった。

もともと備わっている不幸と相まって、相乗効果でも生み出しているのかと思うほど話す相手がいない。

「んー」

曲が変わる境目でチャイムが鳴った。ヘッドホンをカバンに放り投げ、曲をとめる。

これが、桜庭琢磨という男の高校生活である。

放課後になると、やはりというか当然と言うか一人ぼっちだ。

帰宅部員なので帰る時間は早い。どこかしらの部活に入ろうかと思うが、こんな時期に入って居心地の良い部活が思いつかない。

なので、今日も駅までの道をとぼとぼと歩いていると、とある女の子の後ろ姿が見えた。

「北川冬子（きたがわ とうこ）……か？」

髪は肩で切りそろえられ、スラリとした体付きが後ろから見ても分かる。そしてその正体は、学校一とも言われるほどの美少女だった。

その冬子は一瞬、こちらを振り返った。すぐに顔を前に戻したが、視線が合った。

ドキッとする。

ここだけの話だが、冬子と琢磨は幼い時、隣人で、同じ日に生まれたらしい。小学三年生まで一緒に遊んでいたのはおぼろげだが覚えている。しかし、男女間の変な対抗意識に巻き込まれ、そのまま離れて、遊ばなくなり、次第に忘れてしまっていた。

この学校に来るまでは、だ。

すごい美少女がいるぞ、と友達に誘われ着いて行けば、どこかで見知った顔だった。それが冬子と気づくのは更に数日後になるわけだが。

「あいつの記憶から、俺は消えちまってんだろうな」
そう口に出すと、虚しさが心を撫でた。ちょっと寂しい。
声をかけるなんて大それたことはせず、そのまま自宅へと直行した。

……。

家に帰れば、やることも無いのでネットサーフィンが始まる。テレビやネットで話題のワードを打ち込む。
今検索しているのは、クリスマスだ。気が早いと思うが、周りはすでにクリスマスの話題一色。他に調べることもないので、検索を開始した。

「クリスマス、プレゼント、彼女、彼氏……」

検索結果で出てきたワードを読み上げる。どれもこれも華々しいワードばかりだ。
……だんだん腹が立ってきた。
なにが彼女だ彼氏だ。クリスマスごときで浮かれやがって。

「なんだこのリア充履歴は、死ねばいいのに！！」

ぶつけどころのない怒りを声に任せて叫んだ。叫んだと同時に悲しくなった。
肩を落とし、違うワードで検索しようとすると、画面の端に手紙のアイコンが付いた。メールを着信したマークだろう。
そこにカーソルを動かし、中を開く。差出人はオンラインゲーム

で知り合った友人だった。
そのオンラインゲームとは、敵味方に分かれて撃ち合う、疑似戦争を体感できるというもの。ネットで大人気のオンラインゲームの一つだ。
文面をまじまじと見つめる。

差出人「ケーブル」

よう、マーク
最近調子がいいな！
同じチームメイトとして鼻が高いよ
まあ、前置きはこれぐらいにして、ちょっと話があるんだ
近々、オフ会を開こうと思っているんだが、そのついでに面白いイベントも見つけたんだ
その名もサンタ狩り
サンタを狩ると幸せが手に入るとかいうふざけたゲームなんだけど、リアルのサバゲーみたいなものらしいんだ
クリスマスイブの前日から三日間なんだけど、暇？
どうだ？　参加してくれないか？

嬉しい相談だった。
今の生活は、まるで全力で振り続けた炭酸飲料のように刺激が無い。さすがに舌が痛くなるほどの刺激はお断りしたいが。
なら、だ。オフ会に参加して有意義なクリスマスを過ごしてやろう。
毎年のように一人寂しく眠る生活はこりごりだ。
バイトで稼いだ金もたんまりと残っているし、三日間ぐらいの寝泊まりはできる。

それに、幸せという言葉にも惹かれた。プチ不幸な自分の慰めぐらいにはなるだろう。
もしかしたら、本当に幸せになるかも。などと淡い期待をしてみる。
そうと決まれば行動だ。すぐさま返事を書く。

誘いありがとうなケーブル
もち参加するぜ！
会えるのが楽しみだよ

なんか、英文を訳したみたいな文章になってしまったなぁ。
違和感は大して感じないのでそのまま送信した。
返信はすぐに来た。

マジかよ！
そりゃ良かった
他のメンバーも来るらしいから、こりゃお祭りかもな
集合場所なんかは次のメールに載せとくわ

「っしゃあ！　オフ会！！」

小躍りしながら部屋を回ってしまうほど嬉しかった。
ネト充（ネットで充実している人）ゆえの性か、こういう話はてんで舞い込んでこない。
友達の少ない琢磨にとって、生きてきた中で五本の指に入るほどのビッグイベントだ。

次に連続してメールが届いた。ケーブルの書いていた文章通り、中身は集合場所の地図が貼ってあった。その内容を携帯に送り、保存する。
普通なら、ここで悪い人に誘拐されるなどのリスクも考えるべきなのだが、浮かれたままヘラヘラと笑う琢磨は愉快に小躍りするだけだった。

「オっフ会、オっフ会、うーれしぃなー♪」

ついには歌いだしてしまった。
これだけ上がった琢磨のテンションを下げるイベントは、その次の日に起きる。

……。

いつのように、いつもと変わらず、至って普通に登校している桜庭琢磨。
だが、今日の彼は違った。

「ふっふふーん♪」

軽くスキップをしながら満面の笑顔だったのだ。
校門の前に立つ先生が挨拶してきた。

「おはよ」
「おっはよーございまーすっ！！」

先生の声を遮り、大声で叫んだ。他に登校している生徒の視線が

突き刺さるが、まるで何も感じていない琢磨は、そのまま教室へとスキップしながら歩いていくのだった。

「はあ……」

そんな一大イベントがあったとしても、学校での琢磨は相変わらずの一人ぼっちだった。

ヘッドホンを両耳にあて、うつぶせ寝をしていた。

ふいに、肩を叩かれた。

「んあ？」

「お呼びだぞ」

肩を叩いたのは友達の田辺ヨシヤ（たなべ よしや）だった。その顔は引きつっており、なんだか気まずささえ感じられる。

何事かと思い、教室の出入り口をチラッと見る。

「……えっ？」

北川冬子だった。

視線が合うと、冬子は朗らかな笑顔をこちらに向けてきた。心臓がハイスピードでビートを奏で始める。

ヨシヤが耳に口を近づけてきて、小声で話してきた。

「なぁ、お前。冬子さんに何かしたのか？」

「するわけないだろ」

「それもそうか」

そう言うと、ヨシヤは琢磨から離れ、いつものグループに混ざっ

て談笑を始めた。
多少恨めしく思いながらも、頭を切り替えて冬子へと歩み寄る。
正面に立つと、余計に可愛く見えた。鼻や目、顔立ちが全て完璧だし、非のつけどころが無い。
開口一番は琢磨が取る。

「なにか、用ですか？」
「久しぶりだね、たっくん」

教室中の視線が自分たちに集まった。
……コイツら、聞いてないフリしてコッソリ聞き耳たててやがったな。
ちなみに、たっくんというのは小学生の時の琢磨のあだ名だ。妙な懐かしさがこそばゆい。
しかし、教室中から集まる視線がさすがに辛くなり、冬子の手を引っ張って廊下に出る。
そのまま誰もいない場所まで連れて行く。

「……で、久しぶり、って？」
「うん、小学校以来だったからね」

えへへ、と笑う顔にいちいちドキドキしてしまう。
いくら幼い時の友達とはいえ、こんな美少女と親しく話してしまっていいのか、と疑問に思う。カッコイいわけでも、コミュニケーションを取る力があるわけでもない自分が。
「だからね、たっくんに言いたいことがあるんだ」
「脈絡が分からないけど……」

だから、という言葉を間違って使った冬子にツッコまざるおえな

かった。
その返事がおかしかったのか、口に手を軽くあてて、おしとやかに笑う。
「そうだね。じゃあ、直球で言うね」
「う、うん」
冬子の声のトーンが落ちたことで、体が強張ってしまった。唾を飲み込むのにも心なしか精一杯の力が必要だった。
上目遣いでこちらをじっと見据えてきた。
その潤んだ唇が、そっと動く。
「たっくん、付き合ってください！」
時が止まった。
多分、こんな感覚のまま時間が進んでいるんだとしたら、今頃よだれを垂らして、ボーっとしたバカみたいな顔の奴が冬子の前に立っていると思う。
幸いにも自分の体内時計がスローモーションで時を刻んでくれたおかげで、よだれを垂らすバカは現れなかった。
それにしても、今冬子はなんて言った？
「付き合ってください」
もう一度聞こえた。
付き合ってください？　突き合ってください？
ああ、剣道のことか、と思考が停止したとしか思えない結論に至ってしまった。

「悪いけど、俺剣道の経験無いんだよね」
「へ？」

今度は冬子の時が止まった。
あれ、おかしかった？

「突き合ってください、って剣道のことじゃないの？」
「えぇっ、どうしてそうなるの！？」
「いや、突き合って、って」
「あぁ～。もう、違うよ、たっくん。付き合って、っていうのは、交際してほしいってことだよ」

頬を膨らませて怒る冬子可愛いなぐへへ。
おっと危ない危ない。もう少しで完全に頭が飛ぶかと思った。

「交際、俺と冬子が……、交際っっっ！？」
「はい！」

冬子の喜嬉とした声と同時に、どこにそんなに隠れていたのか分からないほどの数の男子生徒が、そこら中から飛び出し、襲いかかってきた。

「「「「「桜庭琢磨の裏切り者ぉぉぉぉ！！！」」」」」

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

視界が真っ暗になる頃には、すでに俺の意識は無くなっていたのだった。

非リア充の俺にメールテクはない

目を開けて見えた物は、一面の白い壁に、黒い穴が平均的な距離を保って空けられていた。
背中を伝うふかふかとした感触から察するに、俺は今布団かベッドに寝かされており、見えているのは天井で、つまり今の今まで気絶していたことになるわけだ。
なにが言いたいか、ズバリ言うと。

「ここ、どこ？」

ボソッと呟く。
右横でバタバタと足音が聞こえ、視界に天井とは違う物が移った。
北川冬子の心配した顔だった。
その顔は、さながら飼い犬が風邪をひいて、処置も対応も分からず慌てているみたいだった。真冬だというのに、その顔には一筋の汗が見える。

「大丈夫だった？」

冬子が口を開いた。
大丈夫だった？　と言われれば、どこも痛まない体を診て言おう。

「大丈夫……」

思ったよりも声がざらついていた。無理やり作った笑顔も不自然な出来だ。
そんな様子が無理をしているように見えたのか、冬子は腕や肩を掴んで揺さぶってきた。

「ねえ、ほんと？　無理してない？」
「大丈夫……だって」
起きたばかりで本調子じゃないだけだ。
そんな言葉をカッコ良く言ってやろうと思った矢先、冬子は安心しきった顔で「ほっ」と声を出した。
「良かったぁ……」
あんなことになった原因はお前にあるだろ、と一言文句を付けたくなったが、ここまで心配してくれた女の子に真顔で言えるほど根性は腐っていない。
むくっと上半身を起き上がらせて、足をベッドから下ろし、冬子と向かい合う形になる。
どうして冬子は、俺なんかを好きになったんだろう？
罰ゲームか、興味本位か、次の彼氏までのツナギか、
本当に好きなのか。
「怪我が無くて良かった、たっくん」
なぜ小学生で終わった関係が、ここで結びつく？
疑問しか浮かばない。浮かべない。ポジティブに考えるほどワケが分からなくなる。
あの笑顔が、無垢な笑顔が嘘のように思えてきた。
「なあ」
「ん？」
無意識に声が出た。

「なんで俺なんかに告白したんだ？」

言った。

まだ付き合っているわけでもない。これじゃあ断る風に聞こえてしまう。

そんな嫌みな質問に、冬子は朗らかな笑顔を浮かべた。

「好きだからだよ」

それだけか？

疑心暗鬼というのは、こういう感じなのだろう。

本当に、本当に、何度も言うが本当に、俺は運動も勉強もお金も顔も良くない人間だ。もしかしたら、性格もヒドいかも知れない。いや、告白してくれた女の子にあんなヒドいことを言える時点で、優しい性格とは言えないだろう。

目の前の、まるで女神のように無垢で、天使のような女の子は、薄汚い心の俺にソッと手を差し伸べた。

「行こっ。午後の授業、始まるよ？」

疑うのがバカバカしくなった。

そうだ。こんな俺にもモテ期が来たんだと思えばいい。一生分の、いや来世もまとめたようなモテ期が。

来世の俺には悪いが、今世は俺の一人勝ちだ。こんな美少女と付き合えるんだぜ？　勝ち組さ。

勝ち組の階段をジェット機で上がっていくような浮かれたテンションのまま、部屋を出る。

「そうだ」

まだ言ってなかったことがあった。

「ん？　なに？」

「さっきの返事、オーケーな」

素っ気なく、別に興味ないような言い方で言ってみた。

そんな返事に、冬子はクスッと笑い、

「ありがと」

ホモでも女好きに変えてしまうんじゃないか、と思えるほどの絶世の笑顔をくれた。

もちろん、午後の授業はちょっとした地獄だった。

クラスメートのほぼ全員がこちらをチラチラと見てはコソコソと話している。

なんなんだ。そんなに俺が学校一の美少女と付き合うのが不満か。ふん、確かに俺は取り柄も無い奴だが、人にはモテ期という物があってだな……。

と、無性に教壇に立ち、クラスメートの前で説教したくなった。でも、そんな度胸はどこにもないし、余計にこじれるだけだから放っておく。そうしておけば悪化はしないのだ。

ホームルームが終わったあと、俺が北川冬子をレイプし、性奴隷にし、無理やり告白させているという実もふたも無い噂がクラス中に広がった。

……どうしてこうなった。

……。

「どうしたもんかねぇ……」

無論、冬子の話でもあるが、彼女が出来たという幸せを噛みしめている最中の俺に、幸せを掴もうぜ！　などという非現実的な話を持ち込んできたケーブルに、なんて言おうか迷っているところだ。

断るのも気まずい。同じメンバーだし、一番中の良い相手だからだ。

なら行くか？　いやいや、彼女を置いて、クリスマスにゲームのオフ会をしている彼氏がどこにいるだろうか。

ならどうする？

「とりあえずまあ、冬子に聞いてみるかな」

休み時間の間に交換していた、携帯の中のメアドと電話番号を探す。

北川冬子。あった。ここは、迷惑じゃないようにメールをする。

こんばんは

さっそくメールしてみたよ

いきなりでごめんだけど、クリスマスとかってどうするの？

こんなもんだろ、と送信ボタンを押す。送ってから色々考えてし

まった。これ素っ気ないんじゃね？　とか、顔文字入れた方が良かったかな？　とか。
そんな不安をよそに、二、三分経ってからメールが返ってきた。

ありがとー
クリスマス？　もちろん、たっくんと一緒にいるよ（笑）

やっぱりそう来るか。
俺だって同じ気持ちだが、先客をむざむざ切り捨てるのも気分が悪い。
まずは頼んでみるか。

実はクリスマスに、ゲームのオフ会に誘われてるんだけど
一緒に行く？

送信。
……っておい！
「オフ会ってなんだよ！　そんな言葉、アイツが知ってるって限らないじゃねえか！」
ケーブルとメールしている時の感覚で返してしまった。
そもそも、なんで彼女連れてオフ会だよ！
「あぁ、なんて言おう……」

背筋に氷水でも垂らされたような悪寒が駆け抜ける。冷や汗が止まらない。
慌てるな慌てるな。ここで慌てちゃいけない。ドイツ軍人はうろたえない。
メールの着信音が鳴った。驚き、肩が跳ねる。
メールを恐る恐る開いた。

オフ会って、『コーリング　アウト　アザー』？
たっくんの大好きなゲームだよね
いいよ！一緒に行こ

え、なんで知ってんだよ。
ちょっと呆然としていると、また着信音が響いた。

驚かせちゃったかな
寝言で言ってたからそうなのかな、と思って（汗
気にしないで！

寝ている時までゲームのこと考えてるって、もはや俺は病気なんじゃないか？
っていうか、寝言で『コーリング　アウト　アザー』って言えた自分に何より驚いた。
もやもやが拭い去れたわけじゃないが、冬子は信用することにする。着いてきてくれるならそれでいいじゃないか。
日時と集合時間を添え、『そうなの？　んじゃ、楽しみにしてるね』とだけ送った。

『うん！　おやすみ』という短文が送られてきたのを見届け、携帯を閉じた。
ケーブルには、なんて言おうか。友達と言っておこう。今はそれぐらいしか思いつかない。
両方を取るって、けっこう残酷な選択してしまったかな。

こうして、まるでリーマンが電車の乗り換えをするかのように、俺の運命もまた、違うルートに乗りかかったのだった。
神様がいるんなら心から感謝するね。まあ、幸せを与える人選を完全に間違えたわけだが。

非リア充の俺にメールテクはない（後書き）

メール文の書き方ってこんなんでいいのかな？

伝説の名勇は笑わない（前書き）

主人公最強は当分先

伝説の名勇は笑わない

なんだかんだで冬休みになった。
終業式が終わるまで、殺し屋（ヒットマン）を名乗る男子生徒を返り討ちにしたりしたのは、また別の話。
まさか、たった一言で学園生活が凄惨なことになるとは予想だにしなかった。
冬子を少々は恨めしく思うが、男子生徒たちは俺のことを羨ましく思っているんだと思うと、嫌な気はしなかった。
勝ち組。
なんて甘美な響きだろう。

「うん、今なら言えるぞ。すばらしきこの世界！」

鼻歌を吹かしながらクローゼットを開ける。
何を隠そう今日はクリスマスイブ前日であり、待ちに待ったオフ会の日だ。オフ会と言っても、サバゲー会場とホテルを往復するだけの予定らしい。
冬子のことは友達なりなんなりでごまかそう。

「さあて、準備も出来たしぃ」

服をささっと着替え終わり、カバンを担ぐ。
玄関まで階段を駆け下りる。

「あだっ！！」

自分で自分の足を踏み、そのまま下まで落ちる。不幸中の幸いにも段が低かったため、大きな怪我はない。

「いてて。はぁ……、なんか、テンションがガクッと下がった」
先ほどまでの浮かれ具合が嘘のように肩を落とす。
痛めた足に気を使いつつ靴を履き、扉を勢いよく開けた。

……。

現地集合と言われていたが、冬子とは最寄りの駅前で会った。俺より早く来て待ってくれてる辺り、面倒見も良さそうだ。
次に、彼女の私服姿を見て、顔が火照った。派手でテカテカした服でもなく、質素で地味でもなく、ごくごく普通の服装なのだが、まるでファッション誌に出てくる有名ブランドのように見える。
冬子が俺に手を振った。

「たっくん〜」

駆け寄る。

「ごめん、待った？」
「ううん。今来たとこ」

本物の彼氏彼女のような会話をしたことに、つい笑みがこぼれた。
と言うが、本当に彼氏彼女だ。
実感が無く、無性にむずがゆい感覚に襲われる。
冬子も、さっきの二割増しぐらいの笑顔を浮かべる。

「じゃ、行こっか」

「ああ」

返事をし、肩を並べて歩く。

横から顔を見るが、やはり可愛い。自分にはもったいないぐらいに。

オフ会の集合場所と思われる公園に着いた。

公園と言っても、小さなカフェが数件経営している大きな公園だ。

こじゃれたテーブルやイスも見渡す限りに並べられている。

そのなかの一角に目立つ集団を見つけた。

地図の集合場所と合う。

恐る恐る、近づいて行った。

「ん？」

金髪の女の子がこちらを振り向いた。

驚き、肩が跳ねた。見るからに外国人だが、幼さも残っていて、なんというか、めちゃくちゃ可愛い。

その女の子はこちらを見るなり早足で寄ってきて、こう尋ねた。

「チーム？」

口調は、アニメなどで見るなまった日本語ではなかった。

先ほどの驚きのせいで声が詰まった俺は、首を縦に振った。

「アカウント名は？」

「ま、マーク……」

「マーク！？」

俺の返答を聞いた途端、金髪の女の子が抱きついてきた。ふくよかな胸がガンガンと当たっていて、ドキドキが止まらない。
その金髪の女の子は俺の右頬に軽くキスをすると、碧い瞳で真っ直ぐとこちらを見つめてきた。

「僕だよ僕！　ケーブルさ！」
「け、けけケーブル！？」

ケーブルと名乗る女の子は嬉しさを体で表現し、きゃっきゃと跳ねていた。そのたびに大きな胸が揺れる。
予想外だった。が、確かにケーブルの一人称は“僕”だ。口調もそことなく似ている。
その外国人のケーブルは不思議そうな表情を、俺の隣に向けた。

「こちらさんは？」

冬子のことだろう。
ここは先手を打っておく。

「ああ、コイツは友だ「彼女です」

俺の言葉に冬子がかぶせてきた。視界の向こうの集まりがざわつき始める。

「へえ、マークって彼女いたんだね」
「ん、ああ、なんかごめん」
「いや、いいんだ。別に悪いわけじゃないしね」

一瞬、寂しげな顔が垣間見えたかと思えば、すぐに笑顔に変わった。

想定していたことよりもアッサリと受け入れてくれたようで、なんだか拍子抜けだ。
山の気候のような突然の変化に戸惑っていると、ケーブルは俺の手を引っ張ってきた。
そのまま引き寄せられ、腕を組む形になる。

「いこう、マーク！」

もふもふとした胸の感触を味わう。腕から伝わる豊満な胸の感触は、ちょっとした極楽だった。
ハッと我に戻る。冬子に振り向くと、相変わらずのニコニコ笑顔だった。彼氏が他の女の子に腕組みされてるのを見て、コイツは何も思わないんだろうか。
そんなことは無いはずだ。と思いたい。

「みんな集まってるよ」

連れられた先には、結構な数の男女がごった返していた。指折り数えて三十人ほどだろうか。
ただ、だいたい女の子同士が雑談しているだけで、男共は黙ったまま携帯ゲーム機をいじる物がほとんどだった。していなかったとしても、ボーっとしてるだけ。
思っていたオフ会と、何か違う。
想像していたのは、男女が楽しく会話していて、コスプレする馬鹿とかいて、大騒ぎしているんだと思っていた。

「これで全員？」

ケーブルに質問する。

「うん、全員。君らで最後さ」

短かな返事が来た。

正直、メンバーなんてほとんど記憶していない。覚えているのはリーダーと副リーダー、それにケーブルくらいなものだ。

「そろそろ動こうか、みんな」

男が一人、立ち上がった。

それが合図だったのか、ぞろぞろと席を立ち始める。

見たところ、あの男がリーダーらしい。かなり背の高い人で、顔もなかなかのイケメンだった。

「あの人がリーダーかな？」

「いや、前のリーダーだね。そして、その正体はその昔、暫定一位を独占し続けてきた伝説の傭兵、孤立無援（オンリーアタッカー）ケージ」

彼がケージか。

チームを立ち上げた途端に姿を消したが、全盛期は「足音を鳴らすだけで殺される」とまで恐れられた名勇。

仲間の支援を受けずにしたキルストリーク（死ぬまでに殺した相手の数）が４０を超えたとかいう、チートプレイを疑われるほどの腕前。

「ケーブル」

ケージが声をあげた。

「会場までの案内を頼めるか？」

「あ、はい！」

頼みを聞いたケーブルはすぐに地図を表示し、目的地を指差す。
「ここからすぐですね。行きましょう」
そう言って、ケーブルが先頭をきって歩き出した。
遅れないように背中を追う。
「近いのか」
「そうみたいだね」
動きづらいと思っていたら、いつの間にか冬子に腕組みされていた。
やはり焼き餅はしてくれたんだな、と感動してしまう。
見慣れない街をキョロキョロしていると、ケージがこちらを見ていた。視線が合うとそっぽを向いたが、またすぐにこちらを見る。
なんだ？　何が言いたいんだ？
「あの、何か？」
「ん、いや、君たちが羨ましくてね。すまない」
案外、素直な人らしい。確かに、美少女と腕を組んで歩ける奴を見て羨ましく思うのは当然だと思う。
でも、何か引っかかる。
「そうなんですか？」
「……」
「違いました？」
「いや、話そうか迷ったんだ。楽しいオフ会で気を重くされても困るからね。言うのは止めておくよ」

「そうですか」

それからまた、無言で歩く。冬子も腕を組むだけで話しかけて来ない。

自分から話しかけるのをヨシとしない自分が、どういう風に話しかけようか小さな脳みそをフル回転させていると。

「ねえ、たっくん」

冬子が先に話しかけてきた。

「なに？」

「たっくんって、運命って信じる？」

「運命？」

「うん。運命。人が産まれて死ぬまでの予定表があるんだとしたら、信じる？」

「難しい質問だな……」

先手を取られたことは嬉しいが、なんて返答すればいいのか分からない質問だった。

しかし、恋人同士の会話にきこえなくもない。

「運命ねえ。信じたくないな」

「どうして？」

「んー。決まっているんだとしたら、なんだか生きることの意味が分からなくなる」

「それも運命なら？」

「う、ううん……」

「もしも、奇跡で運命を変えられるとしたら、奇跡って必要かな？」

「……、必要なんじゃないか？　たとえその奇跡さえも運命だとし

ても、俺は必要だと思う」
「どうして？」
「いや、どうしてって言われてもなぁ……」

自分でも、なぜこんなことを口走ったのか分からない。
いや、そもそもだ。なぜ冬子はこんな話題を持ち出したんだ。宗教か何かの勧誘だろうか。
電波な質問で、頭の中が洗濯機の中のようにグルグルと渦巻いている。
考えるフリをしながら、ケーブルの地図と格闘している姿を見る。
そのケーブルが嬉しそうな声をあげた。

「ありましたありました！」

指差す方向を見ると、古びたゲーム屋があるだけだった。
本当にここなんだろうか。

「なあ、本当にここなのか？」
「うん、間違いないよ。さっそく中に入ろう」

ケーブルは俺の心配もよそにずかずかと店内に入っていった。

「はあ。さすが我らの“切り込み隊長”」

彼女のチーム間の二つ名を、ボソッと呟いた。

伝説の名勇は笑わない（後書き）

感想や質問などあれば、お待ちしてます

俺がこんなにモテるわけがない

先に入ったケーブルの話だと、サンタ狩りが始まるのは晩頃らしい。それまで、自由時間なるものを頂いた。
と言っても、やることが無い。来たことは無いが、どれも見知った店ばかりで景観に新鮮さのかけらもありはしなかった。

「どうすっかなぁ」

灰色の雲で淀んだ空を見上げながら呟く。
すると、横にいた冬子が顔ののぞかせてきた。

「ねえ、暇ならそこらへんブラブラしない？」
「えー」

冬子の誘いでも、あんまり気の乗らない誘いだった。
さっきも書いたが、この辺りには新鮮さが無い。住んでいる町と似ているし、お店だって似たようなところだ。

「めんどい」
「そう？　じゃあ」

冬子は笑顔を浮かべ、
「性交（セックス）しよっか」
「は？」

とんでもないことをさらっと言った。
疑問で返すが、何も理解出来ていないわけじゃない。

ただ、あまりにも唐突すぎたのと、じゃあ性交という気軽さが分からなかったのだ。
最近の女子高生はビッチだと聞くが、ここまでなのだろうか。
さも清純そうな容姿をした冬子ですらこんなことを言うなんて。

「しないの？」

上目遣いで覗き込まれる。
確かにしてみたいさ。思春期だからな。こんな美少女とヤレるなら魔法使いなんてならなくていい。
俺が返答に困っていると、冬子が右頬に人差し指を当て、左右非対称な顔をした。左目を閉じ、口の右端を吊り上げた奇妙な顔だ。

「場所とか気になる？　なら、近くにラブホテルあるし、お金もあるから大丈夫だよ」
「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

付き合って一カ月も経たない仲だぞ？　小学校で遊んでた程度の交友関係だぞ？
つか、昼間だし。
俺の中で、理性と名乗るヒーローが欲望という名の悪党をこらしめている。

「ふふ、小学生の時は積極的だったのにね。ファーストキスだって、たっくんに奪われたのに」
「そうだったっけ？」
「舌だって入れてきたし～。胸も触られたよ～」
「う、嘘だろ！？」
「ふふ、ジョーダンだよ～」

ジョーダンで良かった。
小さな時から変態なのかと心配した。
「だから、ファーストキスの時みたいに、今度も私の初めてを貰ってね」
恥ずかしげもなく、よく堂々と言えるなあと内心で感心していた。
初めて、か。
「冬子は俺以外に付き合った奴っている？」
「いないよ。たっくん一筋だもん」
「一筋？　もしかして、小学生の時からか？」
「うんっ！」
そこまで惚れられてるんだ、と知ると照れてしまう。
でも、当の本人である俺はそこまでの感情を持ち合わせていない。
俺の冬子に対する好きは愛してるという意味じゃない。可愛いからとか、綺麗だとか、そういう外面的な意味でのものだ。
ゆえに、性的な意味でしか見ていない。
長年の願いが叶い、俺と付き合えた冬子だが、まだ片思いのままなのだ。
自分で自分が許せない。冬子の気持ちにそえない自分が。
「で、する？　しない？」
「冬子はしたいのか？」
「したいよ、たっくんと」
「俺も……したいけど……」
理性が押されている。頑張れ俺の理性。

「したい……けど……」
「じゃあ行こっ！」
「う、うん」

ーーー理性さんがログアウトしました。

「どこに行くの～？」

その声と同時に腕を組まれた。さっき感じた柔らかい感覚がよみがえる。
顔を向けると、ケーブルだった。

「け、ケーブル！？」
「やん。ケーブルじゃなくて、僕の名前はアリスだよ？」
「はえ？　あ、アリス？」

おとぎ話かよ、とツッコミたい。
だが似合わない名前でもない。あんなヒラヒラのスカートがついた服なんか着ると、とても似合いそうな容姿だ。
今のアリスの格好は、編みセーターにジーパンという男っぽい格好だ、

「ね、マーク。着いて行ってもいーい？」

アリスは頭を俺の肩に乗せ、猫なで声でねだってきた。
更に次は冬子がアリスの真似をして頭を肩に乗せる。

「たっくんは私と“二人”だけで行くんだもんねー」

二人、という単語を強調させる言い方だった。

「僕だってマークといたいさ。あ、そう言えばマークの本名教えてよ」
「さ、桜庭琢磨……」
「琢磨だからたっくんなのか。じゃあ僕もたっくんって呼ぶよ」
「むう」

冬子が頬を膨らませる。もしかして、頬を膨らませるのは、怒った時の彼女のクセなのだろうか。

「たっくんは私だけが呼ぶもん」

あー、モテモテだな、俺。
来世のモテ期まで使ってるんじゃないかと思ったが、再来世の分まで使ってるなこりゃ。
すまん、来世と再来世の俺よ。存分に堪能させてもらう。

「三人で仲良く行こう、な？」

原因である俺が二人をなだめる。
潔く二人は身を引き、喧嘩を止めた。

「たっくんがそう言うなら、私はいいよ」
「僕も賛成！」

かくして、俺は清純黒髪美少女と、金髪壁眼巨入美少女の二人に挟まれ、ありきたりな町の観光をすることになった。
モテる男はつらいの意味がやっと分かったよ。モテすぎてもしんどいだけだな、こりゃあ。

……。

豪華なホテルのような一室の中、二人の男女がいた。

「今回が本番か」

サンタの衣装を着くずし、胸元のチャックを全開にした筋肉質の男が、ふかふかのソファーに座りながら言った。開かれたチャックの下には、黒いシャツがぴっちりと張り付いている。

「どういう風に彼を“覚醒”させるおつもりなのかしら？」

同じくサンタの格好の女が言った。しかし、女の服装はミニスカートで、白くてスラリとした足が大胆に見える格好だった。

男は女のセリフにクスリと笑う。

「すでにあるだろう？」

「はあ？　まさか、大天使様を使うつもりなの？」

「やむを得んだろう」

言葉のわりにはやけに楽しそうな声で男は笑う。

「北川冬子には、犠牲になってもらう」

……。

「疲れた……」

俺は砂漠で水も飲まずにさ迷っている放浪者のようなザラザラ声で言った。

最初こそライバル意識していた冬子とアリスは、町巡りをしていくうちに仲良くなっていたのだ。

あまりの元気っぷりに振り回され、へとへとになった。

晩頃になり、アリスの携帯が鳴った。

メールらしく、耳に当てずに画面を見つめていた。

「そろそろ集まれってさ」

そう言い、アリスは携帯を閉じた。

疲れ果てた身に、ゲームをする体力は残っているだろうか。いや、動いている間に膝を着くこと間違いなし。

「たっくん、もうすぐだね」

心なしか、冬子の声が震えていた。

確かに寒くなってきたしな。吐く息も白い。

「うわーん、寒いよ琢磨～」

アリスが抱きついてきた。

「ずるいよアリスさん！　たっくん～！」

負けじと冬子も抱きつく。

暖かい。暖かいけど、周りの視線が痛い。

美少女二人もはべらせた冴えない高校生なんて構図、ラノベでし

か見たことないな。

三人でゲーム会場の前に行き、点呼が始まる。
全員が揃ったと分かると、リーダーのケージを先頭にして、会場の中に入って行った。
しかし会場と言っても、古びた小さなゲーム屋だ。一列に並ばないと入れない。
狭さを我慢しながら奥へ進むと、地下に続く階段があった。更にそれを降りる。
長い階段を降りていくと、開けたところに出た。

「ここは……？」

そこには筒形の巨大なケースと、かなりの量の手袋が置いてあった。

俺がこんなにモテるわけがない（後書き）

モテたいね

彼に必要なのは私じゃない（前書き）

ーーー北川冬子、彼女はとある理由で生を受けた。
ーー彼女自身はそれを自覚している。
ーゆえに、現実は残酷だったのだ。

彼に必要なのは私じゃない

並べられた手袋の一つを手に取る。手の甲には摩訶不思議な模様が描かれ、手のひらには円がある。
妙な感じがする手袋だった。いや、場所と言うべきか。
手袋は床に置かれっぱなしだし、筒型の物以外にこれといった機械もない。

「あん？　団体様か？」

その言葉で後ろを振り向く。
そこには、別の入り口から顔を出す中年ぐらいの男が立っていた。
顎髭は短く揃えられているが雑な感じで、見るからに冴えない。

「あなたは？」
「オレか？　オレはこのゲームの古参さ」
「古参？」
「かれこれ十年近くやってるかな」

そんなに前からある大会なのか、ここは。
どこの広告にも無いし、きっとマニア向けの物なんだろう。
その中年男性が入ってくると、その後ろからぞろぞろとたくさんの人が入ってきた。
自分が言うのもなんだが、モテてないんだなーという感じの顔ぶれだ。どの顔にも覇気や元気のような物が無い。

「さて、何人集まった？」
「ざっと三百人ですかな」

遠くでケージとゲーム屋のオヤジが話していた。
三百人か。思ったより少なく見える。
「残った時は何人かな」
「ゆとり世代で遊び気分の奴らじゃあ、せいぜい保って二日ですな」
そこまで難しいゲームなのか？
「二日で充分だ」
「確かに、今回はちと厳しくなりますからね」
いつもより難易度も高いのか？
初心者揃いの集まりである俺たちは大丈夫なんだろうか。
にしても、ケージの言いぐさからして、ここの経験者みたいだな。
後でコツでも聞いておこう。
「たっくん」
背中から冬子の声が聞こえた。
「保って二日って……」
振り向くと、おどおどとした顔の冬子がいた。
さっきの二人の会話が聞こえたらしい。たかがゲームでこんなに怯えてしまっている。
「大丈夫だって」
「でも……」
慰めても顔色を変えない冬子に、俺は精一杯に優しく言う。

「冬子は、俺が死んでも守るから」
その言葉を言った直後、冬子の肩が跳ねた。
驚いた顔のまま固まってしまった。

……。

「保って二日って……」
この戦いは、彼を目覚めさせるための洗礼のようなものだ。
そのために、ここにいる。
保って二日。その言葉が、無性に私の胸を掻いた。不安で圧迫される。
彼を死なせるわけにはいかない。

「大丈夫だって」
優しく語りかけてくる彼の目をまともに直視できない。
これからは彼の運命の予定表さえ狂わせた未来だ。

「でも……」
それでも不安を拭えない私に、彼は一瞬困った顔をしたが、すぐに笑顔になる。
そして、優しく言った。
「冬子は、俺が死んでも守るから」

その言葉を聞いた瞬間、胸がざわつき始める。
小学生の時にも彼から聞いた言葉だ。今でも覚えている。あの時も、こんな優しい顔だった。
心臓が高鳴る。
ありきたりな言葉。アニメや漫画の誰もが言うような定型文なはずなのに。

彼の口から出た途端に、心臓が張り裂けそうになった。

私はそんな存在じゃないはずなのに。
こんな感情、持っても意味無いのに。
彼とは、結ばれないのに。

「大丈夫か？」

彼が私の肩を揺さぶる感覚で我に帰った。
でも開いた口はなかなか塞がってくれない。

「おーい、冬子〜？」

彼の暖かな手が、外気で冷えた私の頬に触れる。
暖かい。

「嬉しい……」

つい出てしまった。

「守ってね、たっくん」

本心なはずだ。
この言葉は、私の腹の底から思った言葉なんだ。
だけど、言った途端に胸が苦しくなった。

……。

「集まったか」

冬子と話していると、巨大な筒型のケースの前に、軍服の男が立っていた。
その男は、先ほど置いてあった手袋を右手にはめている。

「諸君らは、“幸せ”になりたくて来たのだな？」

最初こそ苦笑しながら見ていたが、その男の言葉に、少しずつ「オー」という声が混じり始めた。

「なら、サンタから奪いとれ。すでに幸せを謳歌する者たちに、更に幸せを与えるような屑共から奪い取り、幸せになろう！！」

だんだん「オー」という声が大きくなっていく。
まるで、一瞬でこの場の全員が洗脳されたかのようだ。

「幸せを掴みたいなら、欲望に従順であれ！　少しでも迷うな！
殺すサンタに同情するな！」

これはきっと、狩猟のようなものなのだろう。
サンタはあくまでも狩るべき鹿であり、俺たちは猟師なのだと。

「心の準備が出来た者のみ、そこの手袋を一つ手にし、この《パンドラ》に乗り込め！」

パンドラ？

不幸や罪悪とかいう負の感情の込められた中、一番奥に希望が入っていたとかいう箱か？

確かに、不幸な者がここに来て、奪い取るという罪悪感を乗り越え、希望を手にする、という意味なんだろう。そういうことならバッチリのネーミングだ。

周りが続々と手袋を手にし、《パンドラ》へと入っていく。入った途端にその体が一瞬で消えたのを見てギョッとした。

「わ、私たちも、行こうよ」

「あ、ああ」

俺と冬子も手袋をはめて、《パンドラ》に乗り込む。一瞬、目の前が真っ白になったかと思うと、見慣れた物が正面に現れた。

「地上？」

そう。先ほどの場所の上、つまり地上。景観に新鮮さが無いなどと俺が酷評していた場所だ。

辺りを見回すと、異質な建物が目に入った。

見るからに教会なのだが、大きなステンドグラスの絵はどれも不気味だった。

悪魔みたいな奴が天使のような奴を串刺しにしている絵。金に溺れた男の絵の隣に、骨に溺れている虚ろな目の男の絵がある。

「ひっ」

隣に立つ冬子が小さく悲鳴をあげた。

顔を見ると、歯が噛み合わないのか、カチカチと歯を鳴らしていた。肩もブルブルと震えている。

その様子を見て、単に寒さに震えているだけじゃないのを知る。

「大丈夫か？」

「だ、だだだ大丈夫ぶぶぶ」

大丈夫な気がしない。

顔も青ざめている。

冬子が歩き出したので、俺も横につきそう。

「全員揃ったようですね」

すでに開かれた教会の扉をくぐると、先ほどとは違う軍服の男が中にいた。

「じゃあ、まずは説明をしましょう。と言っても簡単です。武器を言うだけでオーケー」

そう言って、男は手袋をはめた右手を上げる。

「ＭＫ２２」

その声が響くと同時に、手のひらから拳銃が現れる。

「このようになります。まあ、銃の種類が分からない方は、ハンド

ガン、ショットガン、アサルト、ライフルとお呼びください」

音声対応の機械なのか？

いや、その前に、ここはバーチャル世界なのか？　いつの間にか違う世界に飛ばされているし。

バーチャルにしては情景がリアルすぎる。他の人間の顔まで鮮明だぞ。

俺が手足をちらちら見ていると、目の前に立っている男が手をあげた。

軍服の男がその男を指差す。

「質問なんだが、ここはどこなんだ？　いきなり地上に飛ばされる、ってことはここはバーチャルなのか？」

ちょうど俺と同じことを考えている人間だったらしい。

軍服の男はフフンと鼻で笑う。

「ここは別次元です」

は？

「正式には、次元で表すことは出来ません。ここは現実であって現実ではない。極めて現実に近い他次元空間なのです」

聞いたこともないワードだ。他次元空間？　極めて現実に近い？

つまり、ここは俺たちのいた現実じゃない？

周りがざわつき始めた。

「落ち着いてください。これはゲームなのです。お帰りの際は先ほど入ってきた時のように速やかに戻れます」

その軍服の男は言葉のあとに「しかし……」と付け加えた。

「三日間、この世界から出られません」

なんだって？
俺は軍服の男から目を離せないでいた。
血の気の多い奴らが騒ぎだす。

「ふざけんな！」
「俺なんかホテルとったんだぞ！」
「わたしの寝るとこはどうなんのよ！」
「なんとか言えや！！」

罵詈雑言が飛び交う。
だが、そんな喧騒も、すぐに治まる。

「うるさいですねぇ」

軍服の男が取り出した拳銃で、男の近くの人間の頭を吹き飛ばしたからだ。

びちゃびちゃという気持ちの悪い音がよく聞こえた。
また騒ぐが、男が銃口を向けると、ピタッと止まる。

「それで良いのです」

男はニヤリと笑う。

「欲望こそが、この世界の、あなたたちの力になります。じゃないと、サンタ共に、先ほどこのわたくしが撃ち抜いた人間のようにさせられますよ」

恐怖で体が固まった。

「ふーん。そろそろ時間ですね。皆さん、心配はいりませんよ。サンタの持つ幸せの袋さえ手に入れられれば良いのです。そしてここに逃げれば、サンタ共はあなたたちを追ってきません」

そういう問題なのか？

こんな簡単に人が死ぬところで三日間も生き延びろと言うのか？

これじゃ、幸せの袋を手に入れるどころじゃない。

「サバイバルゲーム……。本物のサバイバルゲームじゃないか……！」

彼に必要なのは私じゃない（後書き）

聖母マリアは、キリストを処女のまま身ごもったという。

うん、ただそれだけ。

めちゃくちゃ痛いんだろうな、と思っただけ。

ここはお前たちの知る現実じゃない（前書き）

天使か悪魔？
宗教か何か？
いや、違うね。
宗教なんて小さな物じゃ表せないんだ。
そう、これは天使と悪魔の戦争。

ここはお前たちの知る現実じゃない

一瞬の、壮絶な光景がこれから起こる未来を勝手に連想させる。
死ぬ。
間違いなく、死ぬ。人が死んでいく。
不安感が胸の底から込み上げてくる。

「あ……が……」

息を吸うたびに喉からイカレた音が鳴る。何かが詰まってしまっているかのようだった。
辺りは水を打ったように静まり返ったが、そのほとんどが恐怖で肩を震わせている。

「主催者さんよぉ」

一人の男が恐怖にも震えず、呑気な声をあげた。

「さっさと始めてくれねえか？　あと、そこの死体も生き返らせてさ」

何を言ってるのか、琢磨には理解できない。
生き返らせる？

「それもそうですね」

主催者と呼ばれた軍服の男は頷いた。

「じゃあ、そろそろいいでしょうね」

その主催者の指が鳴る。
と同時に死体に、まるで動画を巻き戻したような動きで散らばった肉片がくっついていく。
死体には、砕けた跡も残らなくなった。

「あ、あれ……」

その死体が声を発した。
あまりにも気味の悪い物を見て皆の悲鳴が響く。

「さてさて、これで心配はいらないでしょう？　恐怖なんていらないんです。欲望だけを持てばいい」

手品？　マジック？
いや、そんな物には見えなかった。
明らかな、異世界の力。

「いつもいつも同じネタばっかで飽きたぜ。次は胴体切断にでもしてくれよ」
「ふふ、いいですよ。そっちも面白そうだ。来年も来てくれるのなら、見せてあげますよ」
「どうだかね。来年に来るかどうか……」
「十年も生き延びたゴキブリのような方が何を……」

十年？　ああ、あの男は、ここに来る前にいた冴えない男か。
こんな非現実的な光景を見ても笑える度胸、さすが古参。
いつの間にか平静を保ててる自分がいた。
危機が去ったという安心が心にゆとりを持たせてくれる。

「さて。そろそろ彼らも近づいてきたので、お手持ちの手袋から武器を呼び出してください」

その声でそこら中から、ハンドガンやら、ＳＶＤだとか、見事にバラバラの声が聞こえてきた。

俺も自分の手袋に向かって声を発する。

「ＡＫ－４７」

サバイバルゲームやシューティングゲームにも馴染みのある名称を言った。

手袋の上にずっしりとした感触と、見慣れたフォルムのアサルトライフルが姿を現した。

「うわぁ」

感動と興奮で胸が高鳴った。

今まさに、憧れの銃を手にしたという実感は、心の中にくすぐったさを呼ぶ。

サバゲー好きなら尚更だ。

「たっ、くん……」

冬子のこらえたような声が聞こえた。

見ると、やたらにデカい銃を両手で持っている。マシンガンだろうか。

普段は腰に据えるタイプの物で、撃てる数と威力も大きいが、その分だけ重量と反動も大きい。

「冬子、それ止めといたら？」

「うん……そ、そうする」
そう言ってマシンガンを地面に落とした。
「ふう……。なにがいいのかなぁ。こういうのさっぱり分からないし……」
「ハンドガンか、サブマシンガンにした方がいいね。軽いし扱いやすいよ」
あーあ、何言ってんだかな俺。
今から始まるのは死ぬこともある本物のサバイバルゲームなんだ。こんな呑気に会話するような状況じゃないのに。
「じゃ、サブマシンガン！」
その声と同時に、銃身が横に短く縦に長い銃が現れる。
「Ｍ１０か。これもお馴染みだね」
「へぇ、そんな名前なのね」
「うん。どのゲームでも扱いやすい仕様だし、コンパクトだから持ち運びも便利なんだよ」
「こ、コンパクト？　確かに小さいけど……、これも重いよ……」
「銃ってたいがい重いよ？　なんなら、ハンドガンにする？」
「ううん、いい」
そう言って、冬子はやせ我慢をしながら首を横に何度も振った。
かく言う俺もやせ我慢している。
「さあ皆さん！！」

主催者が声を裏返させて叫んだ。

「スタートです！　三日間生き延び、幸せの袋を手に入れた者は現実世界で億万長者にも、大企業の社長にだってなり放題！！」

ちと大袈裟な気もするが、なんだかワクワクしてきた。

そのワクワク感はきっと、まだこの現実を受け止めきれてないからなんだろう。

主催者の持つＭＫ２２が甲高く鳴り響くのを合図に、その場にいた全員が散り散りに駆け出した。

……。

「サンタ、か」

桜庭琢磨と冬子は東京タワーの見える方向へと行った。先の言葉は、二人と同じ方向に付いてきた男の言葉だ。

「君ら、カップルかい？」

その男が声をかけてきた。

随分な余裕だな、と思うと同時に照れた。

「えぇ、まあ」

「そうか。なら、彼女のことは死んでも守りぬけ」

「は、はい！」

「ふっ。そうだ、名前を教えておこうか。オレは和田孝治（わだ こうじ）」

「桜庭琢磨です。彼女が、北川冬子」

自己紹介をすると、冬子が頭を下げ、孝治も頭を下げた。

「ま、名前なんか知ってても助けてやれないがな」

笑って言う孝治に、俺もつられて笑う。

「俺だって、助けられるほど余裕があるか分かりませんよ」

ニヒヒ、と笑い合っていると、孝治が口に人差し指をあて、「しっ」と言った。

口をつぐむと同時に、辺りを警戒する。

キョロキョロと視線を飛ばしていると、空に一つの影が見えた。

「あれがサンタか」

孝治も気づいたらしい。

よく目をこらして見ると、トナカイがソリを引っ張っていて、そのソリにサンタが乗っている。

「かあ……。絵本通りの格好なんだな」

まさにそれだ。

赤い服に赤い帽子。白い髭は生えていないが、一目でそれがサンタと分かった。

「ここからなら撃ち落とせーーー」

孝治は言いかけて、途中で止めた。

「そこか！！」

そして何も見えない暗闇に向かって引き金を引いた。
何かに当たった反応は無かったが、すぐに何かが飛び出してくる。

「トナカイか！！」

立派な角を生やしたトナカイがこちらに迫ってきたのだ。
そのトナカイの後ろで数人のサンタがこちらに歩いてくる。
サンタはどいつもこいつも大きな袋を背負っている。

「撃て！！」

孝治の言葉で引き金を引く。
だが、どの弾もトナカイに当たり、奥まで届かない。
弾丸を何発も受けたトナカイは、少しグラグラと揺れた後、ばたりと倒れた。

「よしっ！」

俺がガッツポーズを取るのもつかの間、数人いるサンタの一人が小石を蹴った。

「がっ……！」

その小石は目にも止まらぬ速さで俺のＡＫ－４７に当たる。
なんとか手放さずに済んだが、手がヒリヒリと痛い。

「当たれ、当たれ！」

冬子はいつの間にかＭ１０からＡＫ－４７に持ち替えていた。そして、ちょうどいい段差にＡＫ－４７を置いて構えている。
固定砲台か、考えたな。

「はえぇっ！」

銃口を合わせて撃つが、相手は弾丸以上の速さで横に避けて近づいてくる。
ゲームの経験なんて意味が無い。
苦渋で顔が歪んだ。

「またトナカイが来たぞ！！」

冬子を真似して、孝治はマシンガンを段差に置いて撃っている。
現れたトナカイは完全に武装していた。体中に金属の装甲を貼り付け、肌が見えない。

「ほお。こんなところにいたか、トップヘブン」

ゾクッ、と嫌な感じがした。
その声はマシンガンの銃声よりも体に響いてくる。

「探したぞ」

数人のサンタの後ろに、明らかな他との違いを強調する気配を身にまとったサンタが現れた。
そのサンタは胸元のチャックを開けて、中のシャツがぴっちりと張り付いている。そのせいでいくつにも割れた腹筋が露わになっていた。腕も太く、筋肉隆々という言葉が何より似合いそうだ。

「か、幹部！？」

背後から声が聞こえた。

とっさに振り向くと、同じく筋肉のある男が驚いた顔のまま固まっていた。その体には、右腕が無い。

「ほお。お前は去年、わたしが腕をもぎ取った男じゃないか」

「て、テメェ……！！」

忌々しげな声のあと、背後の男は俺の横に陣取り、片手でサブマシンガンを構えた。

「ここで右腕の借り、返させてもらうぜ……！」

「無様に逃げ帰った愚か者が何を言うか」

男はためらいなく引き金を引いた。

耳をつんざく高温の後、銃弾が全て筋肉のサンタへと当たった。

しかし、当たっただけだった。

「無駄だ」

そのサンタは体に傷一つ付いてはいなかった。服にすら、銃弾の跡は無い。

「ぐっ、あああぁぁっ！！」

男は引き金を引き続ける。

だが、それでもまだ迫ってくる。

「早く撃て！！　逃すな！！」

男が俺に振り向いて叫んだ。
だけど、腕が震えて仕方ない。
恐怖か？
全くダメージの無い相手への恐怖か？

「おい、新人！！　ボサッとしてんじゃねぇ！！　幸せは分けてやらねえからな！！」
「は、はいぃ！」

そう。
ここまでが事の成り行きだ。

ここはお前たちの知る現実じゃない（後書き）

天使に人々の作り出した利器は通用しない。
いや、それは極一部か。
天使の中でも幹部と呼ばれるふざけた奴らが正にそれだ。
奴らに銃弾は効かない。
逃げることが最善の選択なのさ。

いつも俺の隣には誰もいない（前書き）

神様が息をするたびに天使は生まれるらしい
なら、この戦いに終焉はあるのか？
もちろん、ある。
それは、悪魔が滅びるのを待つか

ーーー根元である神を殺すか

いつも俺の隣には誰もいない

桜庭琢磨は、数少ない幸せを知る人間だ。
それは、彼には幸福が無かったからだ。

「ふん、それにしても面白いメンツだな」

筋肉質のサンタが笑う。
いつの間にか周りにいたたくさんのサンタはどこかへ消えてしまっていた。

「悪魔から与えられた力は使わないのか？」

そのサンタの視線は、真っ直ぐに和田孝治を見据えていた。
孝治はその言葉を聞いて、硬直する。

「お前……なんでそれを……」
「見れば分かる。その力、“世界の敵”になりかねないぞ？」
「チッ……」

孝治はマシンガンをそこに置いて駆け出した。
サンタは動じずにただ拳を引く。
自殺行為だ。
あんな細っこい体じゃあ簡単にねじ曲げられる。

「ふんっ！！」

ドゴオォッ、という異質な轟音が耳に届いた。
その音の発生源はやはり、サンタの拳であり、その拳は孝治の腹に入っていた。
死んだ。いや、死なない方がおかしい。
音だけでも相当な威力なのが手に取るように分かった。

「ほお……」

サンタが感嘆のため息をもらした。

「さすがだな」
“世界の敵”。結構だ。毎日がとてもつまらなく思えていたところなんだ！！」

孝治は腹に直撃した腕を右手で引っ張り、左手でサンタの顔を覆う。

「あんまし能力は使いたくないんだがな」

ニヤッ、と笑った。

「オレの能力は、『無意識に心が拒絶する能力』」

そう呟いた途端、サンタが後方へとぶっ飛んだ。体を地面に打ちながらも、易々と立ち上がる。
なにが起きたのか、俺には全く理解出来なかった。
今のが孝治がしたことなのだろうか。なら、すでに人間を超越してしまっている。
孝治は楽しそうに口笛を鳴らす。

「ヒュー。戦闘になるとこんなに威力が出んのかよ。さすがだね」
心から楽しんでいるような調子だった。
ぶっ飛んだサンタは顔ではなく、足を押さえる。
「“自動的”、というわけか」
「“手動的”、とも言うね」
言葉遊びのように、サンタの言葉に孝治は真逆の言葉をかぶせた。
「さあ、どうする？　オレが触れた時点で、アンタの負けは決定したぜぇ？」
「……そのようだな。お前を見ると足が震える」
その科白通りにサンタは足を震わせていた。
「お、おい！」
右腕の無い男が孝治につっかみかかる。
「お前、どうやってーーー」
「能力だ」
孝治は短的に告げた。
その途端、右腕の無い男はパタリと尻餅をついて倒れた。
「触れない方がいい。今、お前の目には『自分が心から恐れる者』が見えているはずだからな」
全くもって理解不能だ。

非現実に非現実を重ねられたせいで、もう思考は追いついていない。

「さあ、どうする？　まだやるか？　これ以上の力を出しちまうと、天使のアンタでも死ぬぞ？」

挑発的な科白に、サンタは苦虫を噛んだような顔をした。

「ならーーー」

サンタはゆっくりと顔の向きを変える。

「標的を変えようか？」

その顔は、冬子に向いていた。

とっさに、俺は冬子とサンタの間に割り込んだ。

「何をする気だ」

「やはり、まだ覚醒しないか」

「なんの話だ」

「トップヘブン、いや桜庭琢磨。お前はまだ、本当に北川冬子を守る気が“無い”な」

「なっ……！？」

今、名前を言い当てられたよりも、その心を見透かされたことに何より驚いた。

その感覚は、その言葉が真実であることを告げている。

「あるに、決まってんだろ！」

「いや、無い。あるのなら、お前は正義の心で、トップヘブンに目

覚めている」
「は……？」

さっきから口に出ているトップヘブンってなんだ？
文句の一言でも言おうとした直後、何かが一瞬で目の前に現れた。
サンタだった。

「お前はまだ、自分の正義を偽善だと思っている」

拳が腹に入った。
孝治の時のような重い響きは無かったが、その一撃は琢磨には耐えきれない物だった。
腹を抱えてのけぞった後、膝をついて冷たい地面に倒れ込む。

「ぐが……あっ……！」

開いた口から唾がボトボトとこぼれ落ちる。
痛みが大きすぎて何も出来ない。

「自分の気持ちに素直になりさえすれば、お前は絶対無敵の最強になれる」
「ひゃっ！」

冬子の悲鳴が聞こえた。
“冬子に何をする気だ。やめろ。”
言いたいが、声が出ない。心の中で叫ぶしか無いのだ。
しかし、サンタはその声を聞き届けたかのように、俺に近づいてくる。

「さすがに上司相手に手は出さない。お前の正義感を見せてもらう

だけだ」

上司、という単語が引っかかった。

サンタは冬子の掴んでいるようで、かろうじて見える足で冬子が引っ張られているのを確認できた。

やめろ。

「や、めろ……。とう、こ……を……！」

絞り出した声も虚しく響く。

サンタと冬子は、一瞬でその場から消えた。

そして、俺も意識を失った。

「とう……こ……」

「目が覚めたか？」

目を開くと、孝治が何食わぬ顔で俺を見ていた。

そうだ。俺、あのサンタに殴られて……。

起き上がろうとすると、腹が痛み、また倒れた。

「あんまし無理すんなよ。常人があんなの受けりゃあ無事なわけねーんだから」

「は、はい……」

力無く頷く。

「桜庭琢磨」

横から違う男の声がした。
首だけ動かすと、袋をいくつも背負ったケージが立っていた。
「そこの男に礼ぐらいは言っておけ。無事に帰ってこれたのもソイツのおかげだからな」
「へへ、最近の大学生は大人をソイツ呼ばわりかい？」
「悪魔と契約した奴に敬語はいらないだろう」
「そういうお前もだろう」

二人は笑いあっていた。
悪魔？　契約？
知っているようで聞き慣れない言葉が頭上で飛び交っていた。
とにかく、薄い意識をつなぎ止め、なんとか口を開く。

「ありがと……孝治さん」
「気にするなよ」

そう言って、へへっ、と笑った。
何秒かの間が空いた。

「二日目だ」

ケージが言った。

「今回のサンタ狩りはイレギュラーだ。イブの前日が休みで、それに乗じて一日増やしたらしい、表では」
「表では、ってのはなんだよ」
「何かおかしな気がするんだ。悪魔と契約した人間が多すぎるし、初日から幹部が出てくるなんてまず有り得ない」
「じゃあ何か？　今日は特別な何かがあんのか？」

「そうは言い切れないが……」
口ごもりながら、ケージは次の句を探そうとしているようだ。
「いや、やはり俺なんかより史助さんに聞いた方がいい。あの人は十年もやってるベテランだからな」
「それもそうか」

二人は俺を放っておいて、お互いの言葉に頷きあった。
そしてどこかへと歩いて行った。
そろそろ腹の痛みもマシになったかと思い、上半身を起こす。やっぱり痛みは小さくなっており、多少苦しいが起き上がれた。

「ここは……」

この世界に来て、初めて目にした教会の中のようだった。不気味な絵が否が応でも思い出させる。
何度も頭を振って探すが、いない。

「冬子が、連れ去られた」

口に出してようやく実感した。
奴は、俺自身が自分の正義を偽善だと思っている、みたいなことを言った。恥ずかしながら正解だ。
冬子に対して情が無いわけじゃない。
ただ、俺の心が逃げている。

「自分が正義になることを恐れている？」

心に語りかける。

「人を救う勇気が無い？」

何かが、つっかえた。

「悪と戦うという勇気が無いんだな？」

“そうだよ。お前は心のどこかで悪と戦うことを恐れている。人と関わることを拒否し続けてきたお前には、人の心に潜む悪に耐性が無い。ゆえに、悪という物を知らず、恐れているんだ。”

自分であり、自分ではない声を聞いた気がした。それは空耳のようにも感じたが、確かに耳に響いていた。

そうなのだ。結局は。

冬子を愛せないのは、単純に性的な意味で好きだったからじゃない。

愛するという行為に抵抗があったからだ。

「お前は冬子を助けたいのか？」

いつの間にか、自分の心と会話していた。

“助けたい。だから抵抗を無くせ。恐れるな。悪を恐れぬ正義の心を持った時、お前は本当の正義者（ヒーロー）になれる。”

「恐れを知らない者は勇気とは言わない。無謀だ」

“たとえそうだとしても、お前は北川冬子を救うために正義者になりきらなきゃならない。”

「迷うな、と言いたいのか？」

“そうだよ。迷ってるくらいならいっそのこと切れ。”

「抵抗、迷い、恐れであるお前をか？」

桜庭琢磨は、いつの間にか人が変わっていた。声は低くなり凛としていて、顔つきも凛々しい。

桜庭琢磨じゃない者の言葉、心の声は「ぐっ……」と呻いた。

“覚醒しつつあるな。”

「質問に答えてもらおうか」

“ふっ、いいぜ。切れよ。俺は抵抗、迷い、恐れでありながら、お前の自制心でもある。俺を切っちまうと、もう二度と普通の人間じゃなくなっちまうぜ？”

「普通の人間？　この神々の王（トップヘブン）に向かって言う言葉か？」

“それもそうか。破滅か救いか。桜庭琢磨が、俺の代わりにお前の自制心だ。”

そう言って、心の中の何かは消えた。

すうっと胸が軽くなるのを感じた。

「さて、」

俺は立ち上がる。

「さらわれたお姫様を助け出すのは、王子の役目だろう？」

いつも俺の隣には誰もいない（後書き）

っつう、非現実的な話なんだ。
え？　最初のモテ具合からすでに非現実的？
そう言うなよ。
あれはモテたんじゃなくて、“仕組まれていた”んだからさ。

彼女には、絶対の救いは無い（前書き）

キャラ壊し回

彼女には、絶対の救いは無い

当の、さらわれたお姫様はと言うと、連れ去った筋肉質のサンタと話をしていた。
場所は女サンタといた時と同じ、豪華な一室である。

「ソリッド。あなた、私を連れ去ることに抵抗を感じていたでしょ？」
「……」

北川冬子……のようにも見えるが、雰囲気がガラッと変わった少女は、筋肉質のサンタをソリッドと呼んだ。
ソリッドは口を開かない。

「メシア教にいながら、自分の正義に疑問を持ったでしょ？」
「そうですね」

琢磨たちと会った時よりも、はるかに丁寧な言葉だった。

「そりゃあ抵抗ぐらい感じますよ。あの桜庭琢磨は、偽善と思っていたとはいえ、本気であなたを守ろうとしてたのですから」
「そうね。ソリッドを前にして、足をブルブル震わせて、地に沈められても、私の名前を呼んでたものね」

そして、また二人は黙り込んだ。
奇妙だ。
この北川冬子は、ソリッドというサンタを前にして、まるで“上司”のように振る舞っている。
そしてソリッドも、“部下”のように恐縮している。

なぜなのか。

「あとはアナタが死ぬだけですよ、大天使様」

大天使、北川冬子はそう呼ばれた。

その通りなのだ。

北川冬子は仮の姿であり、今の彼女が本当の彼女なのだ。

桜庭琢磨を監視するように地上に産まれさせられ、そして桜庭琢磨と一緒にサンタ狩りに参加する。

いや、サンタ狩りは絶対条件ではないが、安全性を考慮してのことだ。

それが北川冬子の任務。

告白し、付き合ったのも、連絡を取りやすくするため。

しかし、ならどうして小学三年生から疎遠になっていたのか。

「運命の予定表さえ狂わなければ、もう少し早く覚醒できたのにね」

「どちらにせよ、あなたは彼の周りの悪魔を追っ払うのに手一杯でしたけどね」

自分を卑下するような北川冬子の言葉に、ソリッドはフォローを入れた。

北川冬子は桜庭琢磨の周りに現れる悪魔たちを倒すことに時間を使いすぎ、疎遠になっていただけだったのだ。別に男女間の抗争意識に巻き込まれたわけじゃない。いや、その方が北川冬子にとって好都合だったわけだが。

「ねえ、桜庭琢磨は生き残れると思う？」

もう北川冬子は彼を、たっくん、とは呼んでいなかった。

「今はカオス教の傘下ですからね。欲で動いていない彼じゃあ分からない」
「そうね。メシアにいたんなら変わったかも知んないけどさ」
「ふふ」

ソリッドがいきなり吹き出した。
怪訝そうに北川冬子はソリッドを見つめる。

「なにがおかしいのよ？」
「いえ、彼が気絶した時のアナタの顔を思い出しまして」
「は、はあ！？」

いきなり顔を真っ赤にして、北川冬子は叫んだ。頬に汗が垂れていて、とても焦っているように見える。

「べ、別に、トップヘブンの器ぐらいしか利用価値の無い人間相手に、心配なんかするわけないじゃない！！」
「必死に抗議していると、むしろ本当なんだと思われますよ？」
「うぐっ、うぅ……」

呻いて、俯いてしまった。
それが余程おかしかったのか、ためらわずにソリッドは話を続けた。

「それに、面白半分で彼に性交しようなどと言って、アリスに邪魔された時の顔とか」
「う、うきゅうぅ……」

もう声にならない声で北川冬子は呻いていた。耳どころか首まで真っ赤だ。身悶えたくて仕方ないだろう。

アリスに性交の邪魔された時、桜庭琢磨は見ていなかったが、北川冬子はものすごく残念そうな顔をしていたのだ。

「最初こそ我慢していたが、積極的なアリスに腹が立ち、ついにアナタが桜庭琢磨に自分からくっついた時なんか、幹部揃って大笑いでしたよ」

「くうぅぅ……！」

ついにソリッドが膝を叩いて大笑いしだした。

「わあああああああああああっっっ！！」

堪忍袋の緒が切れた北川冬子がいきなり叫んだ。

そして、未だに大笑いしているソリッドを指差す。

「あ、ああアナタねぇ！　黙っていたら図に乗ってんじゃないわよ！　私が本気出したら、アナタなんか、アナタなんか一撃で消せるんだからねっ！！」

「おー恐々。そういえば、この会話、他の幹部連中も聞いてるんですけど」

「ふぇ？」

息が抜けたようなふやけた声と同時に、“自分たち”の前の壁が前に向かって、バタンと倒れた。

自分たちの方を見て、北川冬子が「あ、あわわわ」とわなわなしながら此方を見ていた。

第一声には元気よく、

「ちーっす先輩。面白かったっすよ」

自分が挨拶した。
他の奴らも「可愛かったよ～」とか「アンタも取り乱すんだな～」とか「冬子姉ちゃん顔真っ赤～」などと思い思いに煽っている。
まだ状況が理解出来ていないのか、北川冬子は口を抑えて肩をプルプル震わせている。
ソリッドが「せーのっ」という掛け声をかけ、自分たちで一斉に叫ぶ。

「「「「「「ドッキリ大成功～！！！」」」」」」

「うわあああああああああああんっ！！」

とうとう北川冬子が泣き崩れてしまった。
まあ、予想はしてたので驚かない。
ミニスカートのサンタ姿をしている女天使、ラミエルが北川冬子に駆け寄り、よしよしと頭を撫でていた。

「な？　面白いだろ、大天使様は」

ソリッドが悪意のある笑みを浮かべて言った。

「そっすね。気難しい一面しか知らないんで、こんな愛嬌のある方とは思いませんでしたよ」
「天使時代からこういう人だったんだよな、この人は」
「そうなんすか？」
「ああ、他の大天使様とか、同世代の連中にも、さんざんからかわれてたからな」

ソリッドの笑みが、なんだか懐かしい物でも見るような顔になっ

た。

「まあ、そんな彼女だがな、努力は人一倍してたんだ。だから大天使に登りつめ、トップヘブンの監視という重役を背負わされた」

「人は見かけによらないっすね」

「そうだな、確かにそうだ」

北川冬子はラミエルに慰められ、涙をボロボロ流しながらも立ち上がった。

自分も北川冬子の肩を支える。

「大丈夫っすか～？」

「ひゃ、ひゃいひょうふ、ふぇっ」

もう涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃで、何を言ってるか分からない。

「冬子ちゃん、大丈夫？」

ラミエルが懐からティッシュを取り出した。

それで冬子の顔を拭く。

「……うん、ありがと」

自分は、そんな情けない上司に苦笑した。

ただ、こんな彼女も今回のサンタ狩りの、トップヘブンを覚醒させる生け贄になるんだ。

桜庭琢磨の中に眠るトップヘブンは、感情の振れ幅が一定を超えた時に覚醒する。

北川冬子を殺し、その怒りと正義の心でトップヘブンを覚醒させ

るのが北川冬子の使命であり、産まれた意味。
トップヘブンを覚醒させられなければ、世界は終わる。
北川冬子は、自分の命を賭して任務を遂行しようとしている。

……。

「起きても平気なのか？」

二人を見つけ、駆け寄ると、真っ先に気づいた孝治が心配してくれた。
俺はただ、こくりと首を縦に振り、頷いた。

「本当か？」
「大丈夫だろう」

ケージがしつこく質問してくる孝治を止めた。

「大切な彼女がさらわれたんだ。自分だけ寝ているなんて真似、出来るわけないだろ？」
「お前が言うと説得力がありすぎて困るから止めろ」

孝治が苦々しげに言った。
止めに入ってくれたケージの顔も、なんだか苦しそうに見える。

「なあ……」

一つ、気にかかることがあった。

「ん？」
「アリスはどこにいるんだ？」

そう、アリスだ。
ここは戻ってくる場所で、今はボロボロになりながらも帰ってきた人間が何人もいる。心なしか、最初より人数はかなり少ない気がするが。
純粋な質問に、二人は更に顔をしかめた。

「アリス、ってケーブルのことだよな？」
「そうです」

なぜこんなに言いたくなさそうな顔をしてるんだろうか。

「おい、この沈黙じゃあ、何を言おうとしてるのか分かっちまってんだろ」
「それもそうか」

深く、深くケージは深呼吸をした。

「アリスは、死んだよ」
「……えっ？」
「いや、すまん。本当は死んだかどうか確認していない。ただ、幹部の女サンタと戦って、吹き飛ばされたのを見ただけだ」
「吹き飛ば……された？」
「ああ、ビルの上だったんだが、そこからすごい勢いでな。あれじゃあ死んでてもおかしくない」

なんだ。じゃあまだ分からないじゃん。
と、楽観して気を逸らす。

そうでもしなければ、俺は泣いていただろうから。

「すまないな。当たりクジばかり引いちまって」

「仕方ねえさ。お前の能力なんだもんな」

当たりクジ？　能力？

またわけの分からない単語が飛んだ。

なんとなく、意味は分かった。

「ケージさんの能力って、自分に都合の良いことばかり起こる能力ですか？」

口からつい出ていた。

多分、キルストリーク４０とかいうのも、その能力のおかげなんだろう。

ケージは口を少しもごもごとさせるが、意を決したような顔になる。

「ちょっと違うな。本当は、『可能性を操作し、可能性を奪う能力』だ」

「可能性……？」

「ああ、意識的にも、無意識にも発動してしまう。自分が何か出来る可能性の確率を百パーセントに出来るし、他人が出来る可能性を奪うことも出来る」

「じ、じゃあ？」

「無意識に、俺と女サンタが出くわさない可能性を上げてしまい、アリスにその可能性を押し付けたかも知れない」

もう現実じゃないんだな、と心の中で笑った。

「じゃあ、キルストリーク４０っていうのも？」
「ああ、一度だけ、興味本位でやってしまった」

そう言い、ケージは俯いてしまった。
やってはいけないことをして怒られた子供のような、そういう風に見えた。
自分とは全く関係の無いことなのに、すごく腹が立った。
多分それは、やつあたりだったんだと思う。

「ふざけんな！！」

俺は、いつの間にかケージの顔を殴っていた。
だが、ひょろひょろとしたガキの拳なんかじゃあ、まともな痛みすら無い。
驚いた顔のまま、ケージは頬をさすって、こちらを見つめてきた。

「アリスが死んだのはアンタのせいだ！！　きっと、冬子が連れ去られたのもアンタのせいなんだ！！」

なんてくだらないやつあたりだろう。
落ち着け、と心がストップを入れたが、爆発した心は止まらない。

「返せよ！！　返せよおおおおおおお！！」

そして、泣き崩れた。
やはり、自制心はいなくなったんだろうか。止めにきた心はなんだったのか。
小さな子供のように泣きじゃくる俺を見かねて、ケージは目線を合わせてきた。

「すまない」

たった一言だった。

が、それはとても重く感じた。

なぜだろうか。ケージにも、今の自分の子供のような心と似た物が見えた。

自分と同じ心境のような物が。

「さて！」

孝治が手を鳴らした。

「辛気くさくなってんじゃねーよ！　助けるんだろ？　アリスだって死んでないかも知れないんだぜ？」

陽気に言うその言葉に励まされ、俺は顔を上げた。

孝治の言う通りだ。まだ助けられないわけじゃないんだ。

“それでいい”

何か、自分の中から聞こえた。

“自分の正義を信じろ”

ああ、もちろんそうするさ。

涙を手の甲で拭い、立ち上がる。

「まだ、まだまだ終わってねえよな」

子供のような心は、すでに俺の中から消えていた。

彼女には、絶対の救いは無い（後書き）

メシア教とカオス教

メガテンはパクってませんよ断じて

ＴＨＥ　Ｈｅａｖｅｎ（前書き）

ヤツこそが、善悪も生種も老若男女も馬鹿も天才も凡人も才人も極楽浄土へ送り届ける正義者

ソイツの名前はＴＨＥ　Ｈｅａｖｅｎ

下等な奴らにゃ、トップヘブンと呼ばれてる

まあ、別に間違いはないわけだが

ソイツ自体が天国なんだから、意味は違ってくるわな

THE Heaven

二日目の開始が近づいてきた。
俺は今、近くのカフェにある椅子やテーブルを使って、おにぎりを食っていた。さすがに飯食わずじゃあ体は保たない。
ふと見上げると、昨日まで空を灰色に染めていた暗雲が嘘のように晴れ、瞬く星で夜空は彩られている。
そして、大きく映る丸い月。それは満月だった。
その空はまるで、何かを祝福するかのように輝いていた。

「おかしいな」

隣でツナマヨおにぎりにかじりついているケージがポツリと呟いた。

「なにがですか？」
「こんな都会の中心で、星が見えるような綺麗な空になるわけがない」

神妙な面もちだったが、その顔は疑問というよりも、やはりというような確信の顔だった。
俺は持っていた、今ではほとんど食って小さくなった米の塊を口に全部放り込んで、一飲みする。
ケージの言う通り、胸騒ぎがしないでもない。
何か、とても大きなものを招くような、そんな神聖さを感じる空だったからだ。

「さて、と」

テーブルに手を置いて、だるそうに立ち上がるケージに、俺は友達と話すような調子で話しかけた。

「どっか行くんですか？　もうすぐ始まりますけど」

「なんでもない。袋が盗られてないか見てくるだけだ」

「袋？」

そういえば、俺が目を覚ました時、ケージは大量の袋を持っていた。

きっとサンタから手に入れたものなのだろう、と当たり前の推測をした。

「桜庭琢磨」

背を向いた辺りで、ケージが声をかけてきた。

目をパチパチとさせて、俺は出てくる言葉を待つ。

「お前は、命を賭けて彼女を救えるか？」

「え、はい……」

自信なさげに言った俺に、ケージはため息のように笑い吹く。

「お前はまだだ。俺は、守れなかったからな」

「え？」

「目の前で、いつの間にか、ボンってな」

守れなかった、という意味に気づき、ハッとした。

もしかして、この人は、彼女を？

「守れなかった、んですか？」

「ああ。すぐ近くにいながら助けられなかった。厳密には死んでいない。が、死の一歩手前というところだ」

その背中にドンドンと覇気が消えていくのを見た。

「無駄話だったな。絶対、彼女を助けろよ」

そう言い去っていく背中を、ただじっと見つめていた。

いったい、今の彼になんて声をかけるべきだっただろうか。

頑張れ？

諦めるな？

手伝おうか？

その科白はとても安っぽくて、言うのは気が引けた。なんだか、鬱病患者に応援は逆効果だ、と教わった時の心境に似ていた。

解決すべきはケージ自身なのだ。

今は、自分の前だけ見てろ。

「俺も準備すっかな」

腰を上げて、皆のところへ戻った。

「さァァァあっ！！　二日目のスタートです！！」

昨日と同じ主催者の男が、声を裏返して叫んだ。

「君らは生き残れるかなァァっ！？　幸せも、不幸も、ぜェェェんぶ持って帰ってくれたまえ！！」

また、洗脳でもされたかのように歓声が上がった。
アイツは昨日、俺たちの目の前で人を殺しているのに。
「アテはあるか？」
和田孝治が、いつもの彼とは違う、少し暗めな声をかけてきた。
俺はそれに明るく答える。
「いえ、そこらのサンタの首根っこ掴んで、無理やり白状させますよ」
「威勢がいいねェ」
「正義のヒーローが俯いてちゃ、誰も助けられませんよ」
「んじゃ、悪党のオレは俯いてればいいのか？」
ニシシ、と笑う和田を見て、俺も吹き出す。
「そういう風に、不敵に笑えばいいんじゃないですかね」
「いいねソレ。そのネタもらい」
などと話しているうちに、主催者の持ったピストルが空に響いた。
弾かれたように俺たちは走り出した。
……。
「はは、ケージさんも手伝ってくれるんですか？」
「俺に任せておけば、お前は死なないだろうしな」
ケージはＡＫ－４７に隙間なく弾を詰め込んでいた。

「リロードが面倒な時は一度手放して、もう一度呼べばいい」
「へえ。いちいち弾丸を呼ぶ必要が無いんですね」
「そうだ」

礼のつもりで軽く首を下げる。
上げた直後、ケージが目をキッと細めた。

「普通、サンタ以外に俺たちを襲ってくるのはトナカイしかいない」
本を読み上げるように、ケージは早口で続ける。
「だが、幹部が変わったことにより、特殊な迎撃部隊が用意された」
ブウウン、というラジコンヘリのような、飛んできたハエのようにも聞こえる音が聞こえてきた。

「史助さんは、こう呼んでいた」

ケージの目が、ある一点を向いた。
俺もそちらに目を向ける。
すると、黒い影が建物の角からいくつも飛んできた。
……まるで、首だけのトナカイのような形状で。

「人食い（マンティコア）」

その謎の飛行物体は、目から赤いレーザーを飛ばす。
レーザーがすぐ真横を通ったのを見て、一歩後ずさった。

「撃て！！」

その叫び声に触発され、ＡＫ－４７を構え、ろくに標準も合わせずに引き金を引いた。

耳には痛くなるほどの銃声や爆発音が聞こえた。

「見た目に違い、脆いってのは本当らしいな」

弾が無くなり、カツッカツッ、という空ぶったような音で目を開く。

目の前には、トナカイの首のような物体がいくつも落ちていて、欠けている物の中には配線がいくつも通っていた。

そのまま地面に尻餅をついて、肩で息をする。

「無事か？」

「……はい。な、なんとか……」

呼吸も整えずに立ち上がる。

とっさのことで対応出来なかった。乱雑に撃つＡＫ－４７を手放さないように踏ん張って、無駄な体力を使ってしまった。

本当に、弱いなぁ。俺って奴は……。

「今日は今回みたいな奴がごちゃごちゃ出てくる。俺は能力のおかげで安全だが、お前はどうする？」

「はぁ。逃げながらでも、なんとかしますよ」

だんだん楽になってきて、ＡＫ－４７を手放す。そして、もう一度呼んだ。

確認すると、本当に中身は満タンだった。

「実はな、他にも史助さんからいろいろ聞いている」
ケージがＡＫ－４７を地面にわざと落とした。
「奴らは出てくる方向に統一性がある。つまり、アイツらはあの建物の角から出てきたんだから、あの逆を進めば安心だ」
そして、呼び戻した。
つまりは、ケージの言う通りに進めば良いということなのか。
「お前はその安心の方を進めばいい。俺はマンティコアを片っ端から壊す」
「でも、それじゃあ幸せの袋は！？」
「三日目で充分集まるさ」
そして、逃げるようにケージはマンティコアが出てきた建物の角へ走っていった。
一人になってしまった。
あの人といれば幾分か安全だったのに、今じゃあ孤立無援だ。
とにかく、進むしかない。
「全く、ほんとにサバイバルゲームだな」
ぼやけるほどの余裕が心にはあった。
「なんだ、コレ？」
サンタにも出くわさずにとぼとぼと歩いていると、青く光る斜面

を見つけた。
トン、と足を乗っける。
と、足が何かに引っ張られるように、青い斜面を登っていく。
「わ、わわわあああああ！！」
じたばたともがくと、そのまますっ飛んで、どこかのビルの上に背中から着地した。
「いっでぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
背中を引っ掻き回し、痛みを和らげようとするが、体の固い俺は手が届かなかった。
転げ回っていると、誰かの笑い声が聞こえてきた。
「使い方を間違えているな」
つい、痛みも忘れて声のした方を見る。
ソイツは昨日、冬子をさらったサンターーーソリッドだった。
ソリッドはこちらを見て、口元をニヤつかせていた。
「お、お前は……昨日の……！」
「探しているのは、コイツかな」
そう言って、ソリッドは背中に手を伸ばした。
出てきたのは、
「！！　ーーー冬子！！」
北川冬子だった。

ロープでキツく締められている。
その顔は怯えのようでもあり、悲しみでもあり、悔やみのようでもあった。

「いい余興を見せてやろうと思ってな」
「な、なに？」

不適に笑うソリッドは冬子の頭に手を置いて、目をまん丸に開いた。

「お前の目の前で、コイツを殺す」

「なっ……！？」

愕然とした。
なんと言った？
殺す？

「や、やめろ！！」
「嫌だ」
「なんでもするから、やめてくれ！！」
「無理だ」

俺の願いを、ソリッドは冷徹に拒否した。

「じ、じゃあ、どうすれば冬子を助けてくれるんだ！？」
「どうしようとも、コイツは殺すことは決定事項だ」

膝が笑い、地に着いた。
ダメだ。ネガティブになるな。
なんとか自分を叱咤しても、ドンドン気持ちは沈んでいく。
「や、めろ……！！」
絞り出した声もむなしく響くだけだった。
「そこで見ていろ。コイツが死ぬ様を」
「なんで……こんなことを……！！」
「答える義務は無い」
どこまでも冷徹だった。
人じゃない。
こんな悪魔みたいな狂ったヤツは、人じゃない。
ふつふつと、怒りが俺の中で渦巻いてくる。
「させるかよ……」
「だが、手出しはさせない」
顔を上げたが、直後に二人は一瞬にして消え、一つ向こうのビルの屋根に立っていた。
「お前じゃ、救えない」
そして、今度はソリッドだけが消えた。
「怒りに震えろ、桜庭琢磨」
声は、頭上から聞こえた。

それはソリだった。
トナカイに紐がくくりつけられて、そのソリの上にソリッドは立っている。
何をする気だ？
呆然とそのソリを見つめていると、ソリッドが冬子のいるビルに向かって、手をかざした。
何か、不吉な予感がする。

「ーーーアイアフ・ボール」

呪文のような言葉のあと、ソリッドの前に巨大な物が現れた。
炎の球。
轟々と燃える球は小さな太陽のようだった。
一気に気温が高くなり、さっきまで凍えるような寒さだったのが、今では汗を垂らすほど暑い。

「まさか、あんなの撃つ気か！？」

あんなふざけたのを食らったんじゃ、間違いなく死ぬ。
急いで冬子の所まで行かないと。

「でも、どうやって？」

辺りを何度も見回すが、そもそもここは屋上だ。そんなもの、都合よくあるはずが無い。
何か無いのか！？
何も、何も、何も、何も！！
気が狂いそうな怒りと焦りが脳を埋め尽くす。
冬子を見る。
顔は恐怖ではなかった。前に見た、左右非対称の奇妙な顔をして

いた。
まるで、助からない自分を助けるために焦る俺に対して、馬鹿にしたような顔だった。
「くそっ！！」
怒りで地を蹴った。
時に、頭がガクンと下を向いて、見えた。
さっきの青く光る斜面が、今度は真っ直ぐに冬子まで伸びているのを。
気づいた時には走り出していた。
あれなら、まだ救いはある。
「させるかァ！！」
ソリッドの声が聞こえると同時に、炎の球は発射された。
俺は、青い床に飛び乗った。
直後、息も出来ないほどのスピードで体が前へと進む。
それに無理やり逆らって、体を前に少し倒す。
飛んだ。
その青い床のおかげで、俺のジャンプはとてつもない速さになった。
だが、すぐ近くに炎の球が迫っているのを、その暑さで感じる。
これじゃ、無理かも知れない。
「冬子おおおおおおおおおおおお！！」

間に合わない……。
“諦めていいのか？”
……いいわけ、あるかよ。
“なら、ただ真っ直ぐに心を通せ。”
通す？
“簡単だ。ただ、助けたいという思いだけを考えろ。”
助けたいという、思い……。
“今なら出来る。そして、呼べ。”
冬子を、助ける……。
“内なる神（トップヘブン）を。”
「うおおおおおおおおォォォォォッッッ！！！」
そして、俺の中から、何かが溢れてくるのを感じた。
「ーーーたっくん！」
冬子に抱きついた。
間に合った。

“後は任せろ”

その凛々しく響く声が聞こえたと思ったら、俺は炎の球に飲み込まれていた。

ＴＨＥ　Ｈｅａｖｅｎ（後書き）

トップヘブンと戦りあって勝てる奴は

たとえ現実でも漫画でも、アニメでも、小説にすら出てこない。

ヤツは本当の無敵であり、最強なのだから

当たり前のことだ

世界を握る者、覚醒

ソリッドは、その赤く輝く球体に飲み込まれていく二人を見つめていた。
まだ、世界は消えていない。
つまり、まだ桜庭琢磨は死んでいない。

「成功したか……ッ！」

喉に何かが詰まるような感覚があった。
今、彼はとても興奮している。それはさながら、初めて人を心の底から好きになったのと似通っているかもしれない。
なにせ、世界を救ったのだ。自分が。一人で。
トップヘブンの覚醒は成功したことにより、世界が亜空間の渦に飲まれて消滅する事態は回避できた。

「さあ、トップヘブン。姿を表せ」

未だに炎の球は消えず、桜庭琢磨たちのいた場所を潰そうとのしかかっている。
ビルはすでに完全に崩壊して、それは地面をえぐろうとしていた。
あのままじゃ、かのトップヘブンでも死ぬんじゃないか？　と思えるほど変化はない。
大天使すらも簡単に殺せてしまうほどの威力だ。ただで済むはずがない。
めりめり、という不快な音が、燃える音の合間に聞こえる程度だった。
背筋に悪寒が走った、その時だった。

炎の球が、まるで嵐の中心のように渦巻いて、破裂した。
異様な光景だった。
恐怖した。
あれほどの物を弾き飛ばす〈ソレ〉になにより恐怖した。
もしかしたら、その恐怖は世界の崩壊を聞かされた時よりも強かったと思う。
殺気でもない、ただ、そこに漠然と存在する何かに、心の底から恐怖しているのだ。

「あが……が……」

体が震える。寒さじゃない。恐れているのだ。
目の前の炎の球が完全に消えた。
えぐれた地上に、二人の男女が寄り添うように立っていた。
二人ともが無傷だった。あの爆発の中で、一切のキズどころか、ススさえも付着していない。
男の方が、見たことのない格好をしていた。

「俺の正義が、お前を悪だと呼んでいる」

その見たこともない格好の男は、呟いた。
よく見れば、それは中世の戦士のような格好だった。
頭には宝石が一つ付けられたリングを被っていて、服はマントに、軽装な防具を胸や膝にあてている。
ソイツを一言で例えるならば、

「……王子」

率直な感想を、ソリッドは口にした。
その男は、女の方、つまり大天使の額にキスをすると、消えた。

「！？」

消えたと思った直後、右肩に激痛が走り、ソリからぶっ飛ばされた。
肩が外れた。おかしな方向に曲がった腕はブラブラと力なくダレている。
痛みに悶えるヒマも無かった。
両足を掴まれる感触があったと認識した時には、すでに地上に叩きつけられていたのだ。
血反吐を吐こうと胸に力を込めた途端、胸が圧迫された。
それは、足だった。

「答えろ。お前は“世界の敵”か？」

先ほど見えた男が踏みつけており、まるで別人のような表情で言ってきた。
世界の敵？　いや、違う。

「へへ、トップヘブン。あなたを蘇らせ、世界を救った張本人ですよ？」

軽口を叩く余裕があったのは、どこかで頭のネジが取れたからだろう。
今まさに、自分を踏みつけている男は、世界を簡単に救い、世界を簡単に破壊できる者。
ソリッド程度の命、息をするよりも造作もないことなのだ。

恐怖で混乱した頭も、この全身に伝う苦痛で覚まされていく。どんな精神安定剤よりも効果があるだろう。

「俺を蘇らせた者、か」

「ああ、そうですよ。あなたを蘇らせることで、世界を救ったんですよ」

挑発っぽく言ったが、真実だ。

トップヘブンは自分の信じる正義でしか行動できない。ゆえに勇気で、無謀。だからこそ、目をつけられた悪は例外なく死ぬ。

絶対無敵で容赦なし。

「すまないことをしたな」

そう言って、トップヘブンはソリッドの胸から足をどけた。

真実の正義に彼は逆らわない。

一人勝ちだ。ソリッドは心の中で叫んだ。

「だが、な」

襟首を掴まれ、持ち上げられた。

（な、なんだ！？）

慌ててトップヘブンの腕を掴み返し、なんとか離そうと力をこめる。だが、どれだけ力を込めてもびくともしない。

「お前はよくやってくれたとは思うが」

その労いの言葉が、とにかく心に恐怖を煽った。

その次の科白が来ることをとにかく拒否したかった。それを聞けば、ただではすまないような気がした。

いくら足掻こうとも、いくら叫ぼうとも無駄だ。そんなことは分かっている。
それでも生存本能が告げている。
逃げろ、と。

「桜庭琢磨は、まだお前を許していないようだ」

その顔は、まさにすぐ未来に起こることを予知したようだった。
笑いながら謝っているような気楽さや、馬鹿なヤツに対しての〈ヤレヤレ〉というような顔。左右非対称の顔だった。
パッ、と掴まれていた手が離された。

「飛べ」

一言が聞こえた。
すぐに、トップヘブンの拳はソリッドの腹にめり込む。
この拳には、正義や純粋な心はこもっていない。
怒りにまかせた一撃だった。

ボッ、という間抜けな音と共に、ソリッドはいくつものビルを倒壊させて飛んでいき、地域を区切る見えない壁に激突して停止した。
地に伏せた時、すでにソリッドには意識はなかった。ピクピクと体を痙攣させている。

「気は済んだか？」

……。

「たっくん……？」

冬子は、縛られていたロープを無造作に引きちぎり、抜け出す。そして、雰囲気のガラリと変わった桜庭琢磨に近づいて行った。ソリッドを姿が見えなくなるほど吹き飛ばしておきながら、呼吸を全く乱していない。

「北川冬子か」

「は、はい……」

殺気ともなんともつかない存在感を発している彼の声を聞いた途端、冬子の体中に鳥肌がたった。

覇気、と呼ばれる物だったのは、意識の深いところでは気づいている。ただそれを認識するには、あまりにも相手が強大すぎた。

桜庭琢磨こと、トップヘブンは存在するだけで生きているものには恐怖の対象なのか。

「お前を助けろと、桜庭琢磨に呼ばれたのだ」

本人の顔で言われても、違和感があるようなものなのだが、顔は変わっていないのに、別の生き物に感じた。

ぶっ飛んでいったソリッドも心配だが、とにかく、目前の世界の危機は去ったのだ。

「コイツの正義感は、今はバランスが取れていない。しかし、じきに安定する」

「正義感にバランスなんてあるんですか？」

「今回、コイツは俺を呼ぶために自制心を捨てた。それはただ自分の正義をなんの迷いもなく信じられる程度の処置でしかない。根本

的な解決ではなく、その迷いも抵抗も恐れも無い心は悪にも染まる」
「悪に染まると、どうなるんですか？」
「俺が“世界の敵”になる」

途方もないが、見当はついた。
つまりは、桜庭琢磨が悪に染まれば、世界をどうにでも出来る存在が戦うべき相手になる、と。
（ゾッとしないな）

「そういうことだ。だが、心と触れ合ううちにまた自制心は回復する。だからお前は桜庭琢磨と仲良くしてやってくれ」
「はい」

トップヘブンは一度、ニッコリと優しく笑うと、背中から倒れた。
受け止めることも出来ずに、冷たい地面にパタリと落ちた。

「桜庭、琢磨……」

世界を手中に収める者、それを保管する器の少年は安らかに眠っていた。
とてもじゃないが、そんな危ない代物には見えない。むしろトゲの無い花のような人畜無害な寝顔だった。
このまま寝かせるのも可哀想だからと、冬子も地面に座り、琢磨の頭を膝に乗せる。
そっと頭を撫でた。

「たっくん……」

本人は気づきはしないが、もし今の冬子を見ている者がいるとすれば、その冬子の姿を、百人が百人こう言っただろう。

女神のようだ、と。
神に寄り添い、微笑みをたたえる彼女はまさに女神だった。
月明かりがぼうっと二人を照らしていた。

……。

ようやく目を覚ました桜庭琢磨は、北川冬子と共に五体満足で帰ってきた。
教会に近づくと、相変わらず冬子は青ざめたが、それもだんだんと薄らいでいく。
少しばかり呆然としていると、和田の顔が視界に映った。

「よっ」

手を軽く振ってきた。こちらもそれをならって返す。

「無事にお姫様は救い出したみたいだな」
「はは、いつの間にかでしたけどね」

桜庭琢磨は覚えていないのだ。
太陽のように燃える球を弾き返したのも、ソリッドを一撃で沈めたことも。
何もかも。
そんな彼だが、心のわだかまりは無くなっていて、むしろすっきりとした気分になっていた。

「万事オーケーじゃねえか」
「そうっすね。応援してくれたケージさんにも伝えないと」
「……」

和田の顔に陰が差した。
何か、マズいことでも言ったか？
冬子もこちらの話に興味を持ったのか、顔を覗かせてくるが、声を発しない。
砂時計があるならば、すでに下に全ての砂が落ちているであろう、それぐらいの時間、沈黙は続いていた。
そんな進まない展開に終止符を打つため、和田が口を開いた。

「ケージは、行方不明だ」

コッ、という鶏が首でも締められているかのような、ふざけた声が出た。
なん、だって？

「は、はは、え？」
「言葉通りだ。通信機器にも繋がらない。“端末”の奴らもアイツを見失っちまった」

端末？
引っかかるが、ここは無視する。

「でも、まだ帰ってくる可能性だって……」
「もう朝だ。サンタならとっくに退いてるよ。だから、戦場に居続ける理由も無い」

言われて気づいた。

教会の不気味なステンドグラスから見える空は、朝焼けで薄い青と赤などの色が映えている。
夜じゃない。
朝だ。

「だが落ち着いてくれ。お前とケージのお仲間の、なんつったっけな？　あ、あ……」
「アリス？」
「そう、それ！　っておい！」
「たっくん！？」

名前を聞くと同時に走り出していた。
ネットでだが、親友を一目見たかった。
キョロキョロと何度も首を振っていると、建物の陰に座っている金髪の女の子を見つけた。

「アリス！！」

叫ぶが、反応がない。
急いで駆け寄り、肩を揺さぶるが、人形のような脱力感が手の感触で伝わってきた。
もう一度揺さぶろうとした時、何か、ボソボソと言っているのが聞こえた。
なんだ？
耳を澄まして、傾ける。
その言葉は、朝の気持ち良さを悪くさせるには足りる物だった。

「……あの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女

を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺すあの女を殺す……」

ぶつぶつと、お経のように、ただそれだけを続けていた。
腰が抜けてへたり込んでしまう。

「ど、どうしたんだよ、アリス……」

彼女の光の無くなった虚ろな瞳は、嫉妬に駆られた悪魔のようでもあった。
冬子たちが駆け寄ってくるのが見え、琢磨もアリスから逃げるように駆け出す。

「どうしたの、たっくん。顔真っ青だよ？」
「あ、あ、アリスが、アリスが……！」
「だから言おうとしたんだ」

和田が気まずそうに頭を掻いている。

「オレがアリスを見つけた時には、もうああなってた」

三人がアリスを一瞥する。
彼女もまた、トップヘブンに変身した時の桜庭琢磨のようにガラッと変わってしまっていた。
陽から陰へ。
あれだけ明るかったアリスの面影はどこにもなく、ただ溢れ出る負のオーラを放出する物体にすぎない。

「原因とか分からないんですか！？」
「さあね。オレから一つ言えるのは、彼女もまた、悪魔との契約者だ」
「能力を、持っていると？」
今更驚きはしない。非現実なことには慣れてしまったからだ。
「そうだな。アリスの能力は『言葉通りに現実を歪める能力』」
「効果は？」
「例えば、火を出すと言ったとする。それに相手が返事出来なければそれは発動し、返事されると発動しない」
不意打ち向きの能力なんだな、と冷静に推測する。
「その契約する悪魔は、何者なんですか？」
冬子が声を張り上げた。
いや、音量ほど大したことはないが、何か強い意志のような物が感じられた。
質問された和田が、もごもごと返答に迷っている。
「答えてください」
「分かったよ。影羅（えいら）とかいう中学生くらいの女の子だ」
「中学生くらい？」
「ああ」
「契約の仕方は？」
「それは言えない」
「どうしてです？」
「恥ずかしいから」

中学生の女の子とする恥ずかしい契約の仕方ってなんだろ、と考えた辺りで、エロ方向を考えてしまって、考えるのを止めた。
まだ冬子は食ってかかる。

「恥ずかしいなんて言わないで、教えてください」
「警察沙汰になりかねないから止めて本当」

もうダメだ。
エロいことしか思いつかない。

「それでも！！」
「ダメったらダメだ！！　侮蔑（ぶべつ）のこもった眼差しで見られるに決まってる！！」
「あの……」

ああ、興味が勝ってしまった。

「その恥ずかしいことって、ケージさんやアリスもやってますか？」
「ん？　ああ、多分。たしか、そういう能力を与えるのは影羅だけらしいからな」

心の中で、「レズきたあああああああああああいいい！！」と絶叫した。
もう妄想は止まらない。
中学生くらいの女の子をリードする高校生の金髪巨乳少女？　なにそれ、薄い本で欲しい。
そんな妄想に浸っていると、更に和田が追い討ちをかける。

「そういえば、影羅の体の持ち主は、ケージの妹らしいな」

兄妹きたあああああああああああ！！
なにそれエロゲ？　エロゲなの？
鼻から流れる熱い物に気づき、手で鼻を塞いだ。

「もういいです」

呆れきった、と言わんばかりの声で冬子が言った。

「悪魔のすることなんて、たかが知れてますからね」

そして、俺の腕を掴んだ。

「それじゃ」

きびすをかえして歩き出す。
掴んだ腕を離して、と言おうと冬子を見ると、顔が真っ赤になっていた。

「冬子ちゃん顔真っ赤〜」

茶化す風に言うと、見たこともないような怒りの形相をこちらに向け、

「うっさいわよ！！　変態！！」

と、怒鳴ってきた。
なぜ俺が変態なんだ？　と聞くと、

「黙りなさいよ！！　もう！！」

さいですか。

その後、プリプリと怒っている冬子を宥めながら、支給された飯をたいらげた。

これで二日目は終了である。

そして、因縁の三日目が始まる。

世界を握る者、覚醒（後書き）

ヤンデレアリス

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7162y/

俺たちのクリスマスは戦場でした

2011年12月5日23時45分発行